

# 中世対馬の知行形態と朝鮮貿易権

——『宗家判物亨』の研究——

黒 田 省 三

## 目 次

### 第一節 対馬の土地関係と知行形態

#### 第二節 所務知行の内容的分類

- (一) 山手・木手      (二) 錠公事      (三) 一俵物      (四) 二帖疊
- (五) 船の売口買口      (六) 人の売口買口      (七) 塩判      (八) お  
うせん判

#### 第三節 貿易手続に伴なう所務知行

- (九) 吹拳銭      (一〇) 国次      (一一) 送使(印官)

### 第一節 対馬の土地関係と知行形態

荘園制下の中世に於いては、土地に対する権利が複雑に分化して、土地の所有権もあれば、領有権もあり、用益権もあれば、単に得分収取権もあり、これらを汎称して所領と呼んだので、同一の土地に對して多数の所領が存在し、これを職という名称で区別したが、所領

を支配することを知行といい、また領掌とも称した。

土地の知行は、大まかにいって土地自体を支配する下地知行と、土地から収益される所当を支配する所当知行の二つの形態に大別されるが、この両者を兼ねるのが一円知行である。中世も後期になると、所領は守護の権力の下で統合され、殆ど知行の区別が消滅して一円知行地になり、所謂大名領地と化した。大名領地は、領有権を保留したまま、その家臣に旧地を安堵する場合を含めて一部恩給され、給与をうけた家臣は、その土地の知行人となると、領主に対しては給人・被官となり、その忠誠心を反対給付した。このように大名の武力として定着する家臣形成は、知行宛行を通して行なわれたのである。

ところで所当知行は、もともと田畠から収獲される物資を支配すること、米麦の貢租の謂であつて、所謂年貢がこれに当るが、領地内で生産し収益されるものは、例えば林漁業のように田畠からとは限らず、また商業の如きは、その価値の発生源が行為自体に在って、土地そのものから生ずるわけではない。封建領主たる者はその領土内に於

いて生ずるすべての利益を伴う価値を把握して収奪を行なうことを意図しない筈がないから、当然これらのものが所当に包含された。所

当が正税の性質を持つのに對し、特に雑税的なこれらのものは一般に公事或は貢事と呼び慣わされ、課税対象を公物（貢物）とも称した。

また公事が行為によって生ずる營業利益に課せられる場合に特別に運上とも称しており、公事の収取権を分と呼び、その行使を所務といつたが、やがて所務が所領として、分と同じ權利の意味に拡大され、分國は領國と同義となり、近世に至っては所當も所務も等しく年貢を指稱するようにになった。とまれ家臣に對する知行宛行は、飽くまで土地地代を原則として成立したことは間違いない。

さて對馬の場合について眺めて見よう。『魏志』東夷倭人条に、對馬は山が險しく、深林におおわれ、良田がないために、千余戸の住民は海産物を拾い集めて生活し、船に乗って南北に赴いて食糧を交易したと記されていることは屢言したが、中世に入っても『海東諸國紀』日本國紀對馬島条に、

四面皆石山、土瘠民貧、以煮塩・捕魚・販売為生、

とある。地味が瘦せていて住民が貧困であり、塩・漁業と商業活動で生計を立てているというのである。『朝鮮実録』を繕いても、日本に奉使した使臣の聞見事件が数多く報告されているが、いずれも良田に恵まれず、食糧が不足している様子が述べられている。例えば文明十一年に通信使卞孝文に随行した前経歴李仁睦が對島の接待はどうであったかの質問に對して、

本島生利甚薄、雖欲厚待無田也、島主僅有田可種一頃、專仰我國歲賜、と答へ、同十三年敬差官金貞貞は對馬の疲弊について、

土地磽薄、皆山上石田、蕪穢不治、島主家後、只水田數十頃、<sup>○中</sup>其生活專仰本國、<sup>○</sup>

と上言している。いずれもが生活物資たる米が島内で自給できず、朝鮮からの輸入に依存していることを強調しているが、事実中世朝鮮貿易の統制が実施される以前は、わが国の商船が多数連続して南鮮諸浦に赴き、魚塩を以て米穀を貿易していることが『朝鮮太宗実録』<sup>四卷一</sup>太宗七年七月戊寅条議政府啓言によって知られる。

現在の對馬は総面積七〇、九二四ヘクタール、そのうち農地面積は三、〇二七ヘクタールで、実に総面積の四・二％に過ぎず、戦後間もない時の調査であるが、全耕地面積の約五分の一に当る六七一ヘクタールが水田である。米が自給し得ない所以である。

中世に於ける對馬の田積は文献に徴すべきものがないのでわからないが、『倭名類聚抄』<sup>國郡部</sup>によれば四二八町、『拾芥抄』<sup>國郡部</sup>には六二〇町とある。この数値は、これを収載したこれら辞書の成立年代前後の実積と常識的には思われ勝ちであるが、もとより全国的な統計調査など行なわれた様子もないから、数的比較の蓋然性が承認されるだけで、信憑性には乏しい。また『対州編年略』によれば、天文廿一年に宗晴康が島内の検地を行ない、全島の田畑八、二五〇石と査定したと伝えられるが、その典拠は不明であり、当時對馬では土地の評価は米の出来高或は米に換算した石高制を採用せず、町反と蒔高が併用され

ており、——文献的には『宗家判物写』嘉暦三年十二月二日付九そう入道宛宗妙意書下が初見である——一部には貫高さえ行なわれた——『宗家判物写』応永六年十二月八日付小宮六郎宛宗貞茂書下が初見——ようであるから、この石高がどのような算定基準によったか明かでない。殊に『山上家文書』正慶二年四月十六日付山上左衛門亮宛宗慶書下や『三根阿比留家文書』延文四年十二月五日付三根大掾九郎宛完経茂書下に見えるように、木庭が古くから知行地に組入れられて居り、これらの基準が寛文三年の検地によって間高に統合されたと考えられることから、前記石高については全くその根拠が不明であるばかりか、検地そのものも永禄十一年織田信長が近江で行なつて以来、全国統一的な基準で実施されたというのが定説となつて居り、晴康が行なつたすれば、封建領主が領内の百姓を貢租を通して直接に掌握しようとした極めて大まかな検注であつたと想像される。『河内大浦家文書』五月廿一日付大浦民部大夫・同名藏人佐宛宗晴康書状によれば、豊崎四浦に見麦を施行し、公事銭の裁定及び催促を行なつたことがわかる。

寛文三年の検地帳は、今日も長崎県下県郡厳原町国分の万松院境内にある宗家文庫——現地では宗氏文庫と呼んでいる——に島内郷村すべての分が保存されているが、これによると、八郡田畠木庭の惣反別は二、三八八町九畝一五歩、間高で示すと一、三九五間一尺三寸六分となり、その内訳は、畠木庭方一、一五九間一尺二寸七分六厘、田方一六〇間一尺三寸七分、茶方七五間一尺七寸一分四厘で、その百分比

は畠木庭八三%、田一一%、茶畑六%ということになる。(補二)

間尺は土地の收穫高を基礎として計算した単位で、対馬で採用された独特の算法であるが、いつから間尺法が用いられたか明かでない。一説には貞和の頃、惣代官宗頼次○中村が創めたというが、上県郡上対馬町豊の洲河生虎真氏所蔵の『天正十一年田畠坪付』にも現われていない。恐らく慶長・元和の頃に石高の代りに用いられ、それが素地となつて寛文検地ではつきりした形をとつたものであろう。もともと木庭は専ら目分量で蒔目をきめ、面積も收穫高も一定しないために課税上不便であつたので、これを畠と同列に取扱ひ、上々・上・中・下の四種に位を定め、上々畠一町一石五斗蒔、上々田ならば一町一石蒔の收穫高を基準として、蒔種の量を差引いた残高が麦作二石八斗、米ならば一石四斗八升を生産する土地を一間と称し、一間は四尺、以下十進法をとつた。またこの物成は二半の免で、麦五石七斗、米ならば二石八斗七升とした。元禄十六年書上の『八郡郷村帳』によると、惣反別二、三三二町一反一畝一七歩、間高一、三五二間二尺四寸二分とあるが、これを編修した陶山存○純はその收穫高と物成を麦に換算して集計し、次頁の数字を掲げた。

ここに数字の魔術がある。郷村帳は本質的には農村に対する賦税の基準台帳の役割を果たすもので、收穫高に一定の免を乗じた積が物成高を表わすわけであるが、その実際の收穫高の中には当然米麦その他の雑穀類がある筈であり、たとい麦の收穫を基準にしたにしろ、一定しない筈で、しかも和算による換算法を用いて、生産量を合算表示す

郡 名	田畠木庭共	物 成
豊 崎	石 2,949,717	石 737,429
佐 護	3,938,889	984,722
伊 奈	3,323,095	830,773
三 根	2,925,387	721,347
仁 位	3,938,908	984,727
与 良	3,534,162	883,540
佐 須	2,770,292	692,573
豆 酏	1,231,508	307,877
計	石 24,611,958	石 6,152,988

ることは、他藩の石盛が概ね玄米の積を以て行なわれている実情から見ても不合理である。これについて既に陶山存みずからが正徳二年に郡奉行に提出した『口上覚書』中に指摘しているが、正保三年に対馬国絵図と共に公儀に提出した帳面には、物成高六、二六九石七斗一升五合、内粃四〇六石六斗二升三合、麦五、八六三石九升二合と記載し、石高は書かなかった。対馬では粃を玄米にする仕方を五合摺と云い、麦を精麦にする仕方を七合春と呼んでいるところから、前者は玄米二〇三石、後者は精麦四、一四〇石となる。ところで当時の対馬の物成は二ツ半で出来高の四分の一を収納する習慣であったので、延宝九年巡検使奥田八郎右衛門が来島の際に郷村役人に対して行った質問に対

し、正保三年届出の物成高を二ツ半の免で、高二五、〇七六石と答え、さらにこの数字を粃を玄米、麦を精麦に換算して一七、〇三二石となることから、宝永三年に天竜寺寿寧院住持越長老が以酏菴輪番として着任した際の質問には高一七、〇〇〇石と答えたのである。

年貢の高から石高を逆算することは、定免制が恒式化されていない当時、豊凶によって年々の物成が違うので当然変動が見られるが、粃麦と玄米・精麦とではその選庭は一そう大きいことはいうまでもない。宝永六年開板の『広益節用集』に対馬国二万五千石と記載してあるのは、まさしく延宝九年の計算方式による数字で、その物成が粃麦の高で、玄米精麦の高でないのを知らなかったからと思われる。寛文四年の物成高は定免法を採用して、麦六、〇〇三石四升五合とされたが、これは粃麦を合算したものであることは、元禄十一年の粃麦物成高六、三三四石九斗、内訳粃七〇一石六斗七合（五合摺三五〇石余）、麦五、六二三石二斗九升三合（七合春三、九三六石余）となっていることからわかる。宝永五年高役金賦課について藩留守居役鈴木太郎右衛門が公儀に差出した書付には、雑穀高として麦六、二七〇石と記したが、これは正保三年の粃麦を合した高を麦ばかりのように誤って判断し、端数を切上げて、年々の過不足をならした積りで書いたものと思われる。また雑穀高と書いたのは、出来高と物成高を故意か誤ってか、曖昧な表現にしたようである。要するに対馬の表高は藩自体も曖昧にして統一見解がなかったが、実質的な藩収入である諸穀物成も粃麦合せて精白五千石前後であったと考えられる。何故ならば島内収

穫高の中には、八郷給人や足輕扶持地のほか、寺社領分が含まれ、また肝煎役料などもこの中から給分として取得されるから、これらを除いた所謂公領の物成は、寛文十二年は麦四、二六一石一升二合であり、寛保二年には麦四、三二二石七斗五升五合四勺、内訳は畠木庭方三、六一七石七斗三升七合一勺田茶椿森方六九五石一升八合三勺であった。朝鮮通信使の送迎護行や貿易事務のために、他藩に比して家臣の数も意外に多く、その禄米扶持のほか諸般の事務費は莫大であった対馬藩が、叙上の収入だけでは到底賄い切れなかったのは余りにも明白である。

陶山存はその著『財用問答』で対馬藩の収支について、(i)田畠の高二万石の物成と公役銀、現銀上納の分を合せて一万石、(ii)海浦市井の諸運上高の見積り二千石、(iii)金山の利分を田畠の高八万石に見立て、その四ツ物成として三万二千石、合計四万四千石と見積り、これで、(a)諸士雑類の禄米、役人当用の給米一万六千石、(b)公儀への参覲や諸役所の用二万八千石の支出を賄うと述べているが、彼のいう諸士役人とは享保六年現在の上士一七〇人、中士二五〇人、下士二五〇人、計六七〇人の概数を指している。彼はまた叙上の数字について説明を加えているが、(i)高二万石には肥前の所領を加えて高二、八三〇石余の端数を切捨てた概数としている。(ii)運上については鯨鰯の諸浦運上その他薪船帆別運上、酒屋・粧屋・質屋運上の合計約一二〇貫目を米一升六〇目に見積って二千石、(iii)金山とは佐須・琴等の銀鉱の意であるが、その利分の根拠は説明不足で皆目わからない。年間固定の運上

を内輪に見て八千石、流動運上三種の利分一、四四〇貫目を米一升六〇目として二万四千石、合計三万二千石と見積ったらしいが、流動運上が減産や稼行縮小などによって減収の途にあることを考慮すると、八万石という数が単に後述する十万石の格を維持するための架空の数字のようでもある。また支出についても、(a)享保五年の禄米・給米総額が一万三千百石であった事実をもとに、過去に於いて一万六千石を上廻った年もあり、それ以内の年もあったというだけでその数字を観念的に算出しており、既往年度の平均値を計算したわけでもなく、(b)に至っては総収入から禄米・給米高を差引いた残額を記したに過ぎない観がある。全く以て野放図な予算書であり、対馬が生んだ大農政家の計数感覚も良い加減なものである。貿易利潤はもとより、朝鮮からの輸入米について一語の言及がないのは驚く外ない。これに対して、少しく時代が下るが、文化三年朝鮮通信使易地行聘準備下検分のため来島した目付土屋帯刀廉直との『問答覚書』の一節に

御尋 対州者米ナキ所ノ由、御家中之御宛行何を以、御手当被成候哉、

御答 肥前之内田代之米、朝鮮米、自国之麦米を以、宛行置申候、

とあり、また同七年易地行聘期日決定のため来島した戸田采女正氏庸に対する『問答覚書』に

(a)一、対州惣石高はいか程御座候哉、

往昔より公義之御手を以、御検地と申事無之、高を不被定、対州一円と申を以、御領被来候、米千五百石、麦一万六千六百石、総而一万八千百石と津島紀事ニ被記候、

(b) 一、御年貢高、郡中之御所務如何程候哉、

一、粳五百石五升四勺六才

一、麦三千七百四十九石八斗九升七合六勺四才

一、大豆三斗四升九合五勺

一、公役銀大錢七十二貫八十六文三分

此分御郡中御收納之惣高ニ而御座候、年々少しく増減有之候、

(c) 一、御国田代御收納高、朝鮮之御所務一駄銀米を合せ、四ッ物成之御高ニ

見候時ハ如何程ニ相成候哉、

高凡八万七千石程ニハ相成申候、

内三万五千石、御国・田代現石并一万二千兩をメ候、

(d) 一、田代、朝鮮より御到来之米、御国收納之麦も米に直し、年分現に御入

来之分如何程に相成候哉、

米四万五千八百三十俵余

とあって、藩の収入が可成り明確に報告されている。(a)『津島紀事』は文化六年の郡奉行平山次郎左衛門<sup>○号</sup>裴<sup>東山号</sup>が撰進し、同九年に林大学頭乗衡の需めによって川辺清次郎<sup>○号</sup>橋<sup>橋号</sup>が幕府に献じたもの、この数字は当時の最も新しいものと見てよからう。(b)公役銀は元来が百姓から領主の台所用及び諸役方入用の諸物を徴収したもの、寛文三年から代銀納となったが、同五年に銀七〇貫目を目安に八郷の百姓に本戸別に課し、その四分の一は公領地の間数に按分して賦課した。給人はこれを免ぜられたが、その代り寛文十一年無役の給人は間銀と称し、総額二貫目を間尺の高に応じて分賦された。年貢高は、正保三年や元禄十一年のそれと比較して、麦が著しく減少している。(c)は『財

用問答』の(i)(ii)に当るが、同書が四四、〇〇〇石としているのに対し、ここでは八七、〇〇〇石と大きな懸隔がある。それは安永五年に朝鮮貿易の衰退を理由に幕府から毎年一二、〇〇〇両の下賜をうけることとなったからで、銀に直して七三〇貫、米に換算すると、当時一石代銀五五匁として、約一三、〇〇〇石余が含まれて居るからで、不振といっても朝鮮貿易の所務はまだまだ大きいことがわかる。御国・田代の現石など、この問答寛書の数字については、さらに分析検討を要する点が多々あるが、これは別の機会に譲することとして先きに進もう。<sup>(補三)</sup>

江戸時代には確かに將軍家から宗対馬守に与えられた領地目録には対馬国一円とあって石高は示されず、藩もまた石盛を行なわなかったが、中世以来守護大名の家柄を誇り、義智の代に国持大名の格式である従四位下侍従に叙爵されたこともあって、將軍家の慶弔には石高に応じて進献する慣例であったので、家綱の時は五万石以上の格、綱吉の時は自から望んで十萬石以上の格で行ない、常憲院廟に銅灯籠を進献する際も、一基でよいのをわざわざ二基を願ひ出て許されている。いづれも格式を維持するための実績を作る虚しい工作であって、老中の諒解による非公式な承認に過ぎなかったことは、寛文十一年に當時対馬宗氏の分限を一万千八百三十七石と記載した武鑑の版元に交渉して十萬石以上の格に改訂登載させ、さらに元禄十三年には分限帳を公儀に提出して十萬石以上の家格を公称しながら、宝永五年に幕府が富士山噴火による降灰除去費百石につき二両宛全国諸藩に賦課した際にも、一一、八〇〇石として二三〇両を上納させられたことでもわか

る。この表高は肥前田代領の石高に相当するが、田代領というのは、宗義智が文禄四年に朝鮮役の戦功によって豊臣秀吉から薩摩出水郡内一〇、〇〇〇石を与えられ、慶長四年正月には替地として肥前養父郡の内五、七〇七石、同基肆郡の内四、三三〇石、都合一〇、〇三七石を賜ったのがそれで、朝鮮との講和が成立した慶長十年に徳川家康から功によって基肆郡内二、八〇〇石の加増を受け、そのうち園部村一、〇〇〇石は家老柳川下野守調信の子豊前守智永に賜わり、寛永十二年にこの一、〇〇〇石は国書改竄疑獄事件の発生によって没収されたが、正徳元年に通信使護行の功によって宗家に返付されたので、その間正しく田代領の石高は一、八三七石であった。すなわち対馬の分限は、肥前所領の石高だけが公認され、本国の所当はプラス・アルファとして数字的には度外視されていたのである。しかも、理財にとくも本国で一万石、田代領で一万石、朝鮮貿易の所務で一万石、合せて三万石を実高と見込み、極力藩財政の緊縮を遺した宗義真が、なお且つ十萬石以上の格式を意識して、肥後細川家の道中長持五十棹を基準と心得て、挙指すべて大身の大名家中に真似し、遂には御先箱の金紋打物御免を願ひ出るようになり、江戸表の出費が年分銀三千貫を超える羽振りを示して、とかくの批判を招いたのも、このプラス・アルファの中核を為す朝鮮貿易の利潤に期待するものがあったからである。田代々官として在任十年の治績を挙げ、のちには藩の大目付として藩政を監察し來った賀島兵助成白<sup>〇号</sup>が時弊三十四条を列記した『言上書』の中で、

朝鮮御商売の利と御国・基養父の御物成とを入れ、毎年二千五百貫程宛有之候へば、凡そ十二万石程の所務に当り候、

と云っているが、十萬石以上の格式を主張する根拠もこの辺にあったようである。

朝鮮から対馬に輸入された米はどの位あったか、これを数字的に眺めて見ると、慶長十四年己酉約条によって、対馬島主としての歳賜米豆共一〇〇石を贈られたが、正確にいうとこれは白米・大豆各五〇俵のことで、第一船送使に附搭された。このほか使人に対する宴享や接待に、米その他の雜穀類が支給されたが、特に諸船料として、使人は正官・都船主から格人に至るまで全員の釜山浦滞在費と陸物と称する船舶修理費、それに渡海料すなわち各船毎に渡航手当が支給され、ともかく諸船料年間総額米二、〇四一石一四斗三升、大豆六三七石一斗二升、渡海料米三三石一三斗、それに修理費一五六石一〇斗が加給されたのである。これは『通文館志』<sup>卷五 交通上</sup> 年例送使 によって集計した数字であるが、寛政十年巡検使田島監物の質問に対する印判使阿比留伝右衛門の問答書控によると、<sup>(二五)</sup> 年例八送使が朝鮮から年間支給された穀類は、白米一、八五六俵三斗九升三合八勺三才、大豆三三三俵一斗九升であり、そのうち渡海料は米六〇七俵四斗八升八合二勺五才、大豆七〇俵四升九合が含まれていた。<sup>(二六)</sup> これらは朝鮮貿易の余禄として大きな魅力であったに相違ない。

また貿易の主体である公貿易は、別幅の封進とともに、各船毎に品目と数量が協定され、決済は朝鮮政府が公課として徴収した木綿すな

わち公木を以て行なわれたが、寛永十二年以降は、宴享接待の諸経費を節約するため、朝鮮側の要望によって兼帯など諸々の便法が講定され、貿易船は歳遣・特送ならびに受図書船を統括して年八回一四般に整理されて、所謂年例八送使に定着した。それでも各送使の封進及び公貿易の総額は、『通文館志』によれば、価木一、一三一同一五疋二〇尺五寸であり、国立国会図書館所蔵宗家記録『当時公貿易并朝鮮御商売御利潤銀凡考之積帳』によれば、一、〇三四四五疋七尺二寸となっている。その後、公木は漸次その品質が劣悪になったので、慶安四年にこれを口実に朝鮮側と交渉して、価木のうち三〇〇同だけを毎疋作米一二斗の割合で米に換えることとなった。公作米がこれである。朝鮮の一石は一五斗に当り、また公木一同は束とも云い五〇疋であるから、一同は四〇石、三〇〇同で米一二、〇〇〇石となる。ところがこの作米は慶尚道の各郡県に分定して、その租米を充当するわけだが、朝鮮では連年凶作が続いて協定の完全履行ができず、明暦元年までに六〇、〇〇〇石も換米が延滞したので、万治元年には更に一〇〇〇同の換米を増加し、年間四〇〇同すなわち一六、〇〇〇石を木綿から米に換えることに協定を改め、やがてこれを恒例とすることに成功した。また当時、朝鮮の一斗枴はわが京枴の三升五合であったから、一斗につき京枴二升三合の加升を交渉して、これを承諾させたが、それでも一石の算用は京枴八斗七升になるので、一六、〇〇〇石は京枴一三、九二〇石に相当した。<sup>(二七)</sup>

このほかに封進に対する回賜及び別幅求請に鷹子があったが、その

五六連を折半して、二八連は毎連白米一五石、同じく二八連は毎連木綿三〇疋に換算して支給される協定ができたので、作米四二〇石が加給された。京枴に直せば三六五石四斗になる。<sup>(二八)</sup>以上で、私貿易には米が対象とならないから、朝鮮から毎年米が輸入されるルートは、漂流巡差を除けば、これに尽きるわけである。『通文館志』によって一年間に朝鮮から輸入される米の数量を計算すると、大豆その他を除いて一九、〇三一石、これを京枴に直して、約一六、五五七石となる。またこれを国会図書館所蔵前掲記録によると、漂流巡差及び別幅求請の物換米を含んだ数値であるが、公木四〇〇束代米一三、三三三俵一斗七升五合を加えて、一六、六一六俵二石五升一合二才である。前者は朝鮮側の公的な規定に基いた数字で、実際にはこのほか、例えば和館の館守に白米年間一三〇俵、大豆四〇俵、一代官以下目付に至るまで計一五〇俵の配当米を支給しているが、後者はこれらすべてを合算し、既往三年間の平均値を表示したものであった。いまこの数字から和館の諸経費即ち館守以下通詞・走番に至るまでの藩側の給米その他の賄入用、東萊府役官に対する音物その他の交際費、それに両地を往復する飛脚船・運送船に関する諸費、対馬島内各渡口番所の維持費など貿易事務に関するすべての経費を差引くと、<sup>(二九)</sup>残白米一〇、〇五六俵三斗五合三勺九寸となり、これが対馬に輸入消費される米の実数高になるわけである。

翻って田代米について眺めると、正徳元年十一月に將軍家より宗義方に賜った領地目録によれば、



対馬国一円

肥前国基肄郡之内二十二村

高九千五百二十三石三斗四升

同国養父郡之内十ヶ村

高四千二百八十石三斗八升

都合一万三千四百二石七斗二升

(二〇)とあり、その物成は『基肄養父郡御領中略記』によれば、(二一)定免法に改められた元禄十二年には、三ツ九分四厘九毛一四六三で、米豆五、九九九石、それ以前では、田方五ツ五分五厘の穂検見免で、貞享十一年の米豆七、七〇二石一斗六合、元禄十一年の米豆七、七五二石八斗三升二合二勺が最高の収納であった。(二二)『田代覚書』によると、このほか小物成が米一四四俵一斗一升八合、大豆三八九俵五斗六合七勺、麦九八俵一斗二合、それに町屋敷年貢米が田代八〇俵二斗八升八勺、瓜生野八〇俵二斗三合九勺、伯楽米一一石八斗二升三合、公役代米六七〇石などが賦課されたが、米一俵は京榊三斗三升入、麦は伊奈榊四斗入(三三)京榊五斗七升、京榊五斗入として米に換算すると、総額は大まかに見て八、〇〇〇石弱となる勘定である。すなわち、藩の蔵入米は、本国と田代領を合わせて約一三、〇〇〇石、概称の一万石より多いが、これに朝鮮から輸入される実数八、五〇〇石を加えて都合二一、〇〇〇石近い数字になる。

陶山存はその著『対韓雜記』で元禄十年の島民需給の状態を論じ、島内收穫高麦二三、〇〇〇石、米三、〇〇〇石を精白して合計二〇、

〇〇〇石に満たないのに、全人口三二、〇〇〇のうち、一人平均一日三合と見ても僅かに一八、〇〇〇人を養うに過ぎず、その不足分は肥前領の貢米で四、〇〇〇人、筑前の貢米で、三、〇〇〇人、朝鮮の貿易米で残り七、〇〇〇人を養わなくてはならないと説明し、また『口上覚書』では詳細に島内人口の推移を表示しているが、百姓・町人は単なる収奪の対象としか考えなかった藩首脳は、人口増加に対する民生維持よりも寧ろ収獲高に基づく物成高により関心があつた筈であるから、人口を論ずるよりも、藩財政によって賄われる家臣の数は果してどの位あつたかの方が問題となる。

対馬藩家臣の数は、年代によって増減があつたが、概して漸増の傾向にあつたことは間違いない。前掲『賀島兵助言上書』によれば、寛文の頃、在府の士四〇四人、禄米六、〇三〇石であつたのが、貞享の頃は二三、六五〇石余となり、陶山存の『津馬紀略』によると、元禄十二年には九八〇人、一四、〇六〇石に増加している。『財用問答』によれば、享保六年は六七〇人、その前年の禄米一三、一〇〇石であつたという。今少し精確な数字を見てみよう。土地を宛行われた田舎給人は別枠として、給禄の対象となる在府の家臣数は、文政四年の『府中分限帳』によれば、暢孫志摩の高五百石を含め、杉村伊織以下馬廻二二三名、大小姓三三三名、徒士二六三名、計八〇八名であり、嘉永七年の『府内分限帳』によれば、長崎・京都・大阪・田代詰及び徒士格四七名を除いて、なお馬廻二二三名、大小姓三三三名、徒士二八〇名、計八四二名であつた。(二四)前掲文化七年『問答覚書』には、

一、御家中三格之家数當時如何程候哉、

一、御馬廻二百九家

内番頭四十九家 同医師十家

一、大小姓三百家

内儀取六十八家 同住宅二家 同大小姓格二家 同医師十八家

外ニ一代大小姓之人七人 同断大小姓格医師一人

一、御徒士二百六十七家

内旅住宅六家

外ニ田代在住三人 御徒士二人 二代御徒士二人 一代御徒士九人

一代御徒士格九人 御茶屋六人

都合七百七拾六家 三格永祿之家高

外ニ三代以下之人四十七人茶屋共 同御馬廻部屋棲六十九人 同大小姓

同断五十六人 同御徒士同断六十八人 合百九十三人

右當時之惣人数ニ而候、以前義成様御代之末、慶安年之比ハ、大小姓杯ハ至而少ク纔十八人と相見、義真様初代ニハ馬廻六十三人・大小姓八十四人・御歩行三百七十人、メ四百五十四人と相見、右之御時代ハ銀山之繁栄、朝鮮貿易之御利潤、年々夥數、一万二千貫目ハ一万六千貫目ニ及、現石ニ直し二十万石余の御所務と相見候、御時勢御家中漸ク四百五十人ニ不過、只今ハ御国田代御收納高、朝鮮之御所務一鉢之銀米を合、四ツ物成として八万石余之御高にも可及哉ニ候処、御家中ハ如右倍にも及候様相成申候、

とあって、銀山の衰頹・朝鮮貿易の不振による藩財政の下向に逆比例して、家中の膨張が著しいことを訴えている。陶山存がその利分を三二、〇〇〇石と見積つた佐須銀山は、寛文の頃を稼行最盛期とし、元禄中期頃から衰微しはじめ、享保・元文の頃には全く下火となった如

くであるが、三二、〇〇〇石は銀高一、九二〇貫に相当する。その生産額については、宗家文庫所蔵『灰吹銀上納帳』によって僅かに衰退期に入った正徳二年分が知られるが、生産利潤についての精確な記録を欠くので一切不明である。

抑も朝鮮貿易において、私貿易では銀が決済に充てられ、多量の銀が輸出されたが、その殆どがわが国の通貨である丁銀で、吹銀は慶長以来輸出を禁ぜられていたので、国立国会図書館所蔵宗家記録『御商売御利潤并御銀鉄物渡并御代物朝鮮ハ出高積立之覚』によれば、現銀の輸出は貞享元年の二、〇八〇貫目が最高で、以後は若干の高低があるが、概ね下降線をたどっている。<sup>(補二)</sup>ただ、貞享以前と特鑄銀が交付された宝永八年以降の正確な記録がないので、品位の低い元禄銀の増歩加給が朝鮮貿易に及ぼした影響は数字的には把握し難い。また長崎貿易に於ては、貞享二年に定高仕法が施行されると共に、唐船銀六、〇〇〇貫、蘭船三、〇〇〇貫を年間貿易高と規定したので、翌三年に對馬藩の朝鮮貿易高を年間金一八、〇〇〇両すなわち銀一、〇八〇貫目とし、さらに元禄銀改鑄による貿易額の減価を補うために、對馬の要請によって、元禄十三年に銀一、八〇〇貫に増額したが、藩は勝手にこれを銀持渡制限高と解釈した。しかも前掲記録によれば、既にそれ以前の貞享三年ですら銀輸出高は、一、八八八貫三九三匁であり、現実に殆ど連年この輸出制限額を超過している。<sup>(二七)</sup>

これによっても藩はいかに貿易による利潤追求を推進したかが窺われる。しかも公貿易は朝鮮政府管理の下に行なわれ、木綿と米が輸入

の主目的であるが、木綿の国内販売による利潤は国内生産の増加によって漸く減少の途を辿って居り、これに対して和館に於いて政府官吏の立会の下に彼地商人との間で行なわれる私貿易は白糸・端物及び薬用人参を主要輸入品とし、その取引額と利潤は遙かに公貿易を上廻ったから、私貿易こそ貿易の主体であり、貿易利潤の追求は私貿易の盛行によってはじめて達成されるのである。なお私貿易に於けるわが方の輸出品は公貿易と大差なく、銀・銅がその中心であった。正徳五年に書かれたと思われる前掲『御商売御利潤并御銀鉄物渡并御代物朝鮮が出高積立之覚』は貞享元年から宝永七年に至る藩の貿易利潤の全貌を解明するものであるが、貞享元年を例示すると、その輸出品利潤は銀一、〇六五貫二七〇匁即ち金一七、〇〇〇両であるのに対し（輸出品売渡代銀総計二、六七八貫三八八匁三厘、内訳現銀、慶長銀を含めて二、〇七九貫九二五匁、売渡代銀八四三貫四四八匁二分四厘、その四割潰しとして六〇二貫六四三匁三厘）輸入品を国内で販売して得た利潤は銀三、五五九貫四二三匁六分即ち金五九、〇〇〇両で、後者の方が遙かに大である。また同期間中、輸出入利潤の最高なのは元禄七年で、輸出利潤は銀三、八〇六貫一六〇匁、輸入利潤は銀一六、六二五貫八〇七匁六分、貿易利潤計銀二〇、四三一貫九六七匁六分即ち金三四〇、〇〇〇両となり、公貿易利潤は銀三〇〇貫即ち金五、〇〇〇両であるから、大部分が私貿易によるものであることがわかる。<sup>二八</sup>

ところがこの私貿易が漸く不振となり、遂に明和・安永の頃には杜絶の状態となった。その理由は、先ず(1)宝永丁銀が品位の低下によつ

て額面通り朝鮮に通用しなくなり、そのために持渡額一、四一七貫五〇〇匁を限度に特鑄銀の使用を認められたが、やがて文ノ字銀が鑄造されると、貿易利潤の源泉である銀は、島内銀山の廃頽とまって、両替に於ける増歩による古銀引替の苦渋が仕込の隘路となった。また(2)年間三十万斤の持渡制限があった銅が、明和の頃から大坂銅座方から買入れる限度が年間十万斤に減ぜられ、さらに(3)これにつぐ輸出品である胡椒・丹木・明礬・水牛角など南方物資が蜜船の貿易制限によって輸入が激減し、そのために価格が騰貴して全く採算がとれず、公貿易すら代銅による物換の余儀なきに至った。しかも(4)江界人参の減産に伴ない、品質が低下した上に、年条の礼單及び求請に於いても逐年未収が多くなり、(5)日本への中継貿易品として朝鮮のドル箱であった白糸・端物類も竜湾開市の不振から供給難による高値を生じ、一方にわが国内では和糸の増産に基づく輸入白糸の下落によって、いよいよ採算がとれなくなった。このような諸々の悪材料が彼我の間に介在したために、自然と私貿易の続行が不可能となったのである。<sup>二九</sup>

私貿易の断絶は、藩にとって致命的である。そこで藩は幕府に致し、拝借金を請うて、財政の不足を補い、また貿易挽回のために下賜金を請うた。すなわち延享三年から毎歳補助金一万両の下賜をうけ、安永五年には毎歳一万二千両の下賜をうけることとなった。これは精米三万石以上に相当し、物成四ツとしても高八万石の加増に等しかつた。このほかにしばしば外交事務管掌の手当として賜金をうけていた。拝借金は、元禄十三年に貿易資金として三万両を借りたのを手初

めに、享保二年に五千両、同十七年に一万両、延享三年に三万両、宝暦八年に一万両、同十一年に八万両、明和五年に一万五千両、安永七年に六千両、同九年には返済の延期を幕府に請うて許されたが、その時の借金総額は実に延一五二、四五〇両となっていた。これらの賜金及び借金は、貿易振興は全くの口実で、専ら藩財政の赤字補填に充てられたので、貿易の好転は望むべくもなかった。寛政五年には米一万石の借米を幕府に申出て許されたが、貿易を表面の理由にできなくなった証左で、文化十二年には朝鮮の凶荒による米の輸入杜絶を口実に、幕府から二カ年間二万石を支給され、同十四年には易地行聘の行賞として、肥前国松浦郡・筑前国怡土郡・下野国安蘇・都賀両郡内に二万石の加増をうけ、しかも文政十年にも朝鮮の凶作を理由にまた米一万石を給された。実は四〇〇同の公作米が文化の中頃から漸く輸入停滞し勝ちとなりつつあったのである。このような事態は、いかに朝鮮貿易が対馬一藩の財政と密接不可分であったかを如実に物語っているといえよう。

そこで翻ってこれらの事情を顧慮しつつ、中世に於ける対馬の知行形態がどうであったかを考察しよう。少弐武藤氏の分国であった対馬では、宗氏の入島以前から、ここに土着して、少弐氏から土地を宛行われていた諸氏は少くなかったと思われるが、対馬編著の諸書によると、宗重尚が在庁官人として自己と対立関係にある阿比留氏の勢力を排除するに当って、斎藤・立石・饗庭・島屋・津原・梅野・黒川・津江・中原・俵の諸氏二百余人を率いて渡島し、大掾阿比留国信を討って、

自ら少弐被官として目代乃至地頭代の地位を獲得し、よって宗氏島内支配の基礎を築いたと伝えられる。『斎藤氏系譜』によれば、斎藤氏は兵庫為持を始祖とし、その経歴はどこまで史実か疑わしいが、壇ノ浦合戦後、平知盛の遺子で宗氏の始祖といわれる知宗を擁して筑前の大宰府に走ったとし、二代帯刀盛直は重尚の対馬入島に従軍した者として、『御附渡覚書』にその名が出ている。三代の兵衛三郎資定は、文永十一年蒙古襲来の際に佐須の浜で防戦、地頭代宗資国とともに国難に殉じた。宗氏とは因縁浅からぬ家柄で、その建業には功績も多いが、『斎藤家文書』延慶四年六月日付久根次郎右衛門定能申状によれば、文永の頃には佐須郡久根在家と豊崎郡古里浦を知行し、これを少弐貞経から安堵されている。また『大山小田系図』によれば、小田氏は豊後の国人で、平九郎盛村のとき、重尚に従って入島したといわれるが、『大山小田家文書』嘉暦二年十二月廿八日付宗馬弥次郎入道宛妙恵<sup>〇少弐</sup>書下によれば、与良郡大山の所領相続が認められている。さらに豊崎郡河内の大浦氏は『大浦氏系図』によれば、その先祖は宗氏入島以前に在庁として勢力を奮った阿比留氏の庶流で、杵岐守某が阿比留国信討伐に当って宗氏に加担したため子右馬八郎茂清のとき<sup>三三</sup>に宗姓を賜ったとあり、伊奈郡小鹿村の扇氏は『扇氏世系』によると、もと丹波の藤原氏、右衛門佐久元が少弐目代として対馬に渡り、はじめ与良郡に住み、子孫が掾官として対馬在庁となっていた如くである。これとまた南北朝争乱期に宗経茂が筑前守護代となっていたことから、この期間に北朝方に同心するものとして宗氏に服属した北九

州の諸氏も多かったようで、豊崎郡豊村の洲河氏は、もと武蔵の住人で、その祖沙弥了心が建武三年に足利尊氏の東上に経茂とともに少武頼尚の軍に従い、和田崎の合戦に加わり、正平に初めに伊奈郡に土地を宛行われたが、三根郡志多賀村の長野氏も、その祖左衛門三郎助豊が建武三年に京都鞍馬路の合戦、翌四年には筑前馬見岳の合戦に軍忠を抽んで居り、北九州に土地を宛行われ、宗貞茂の代に、これに従って対馬に渡った。これらの諸氏は対馬に住みついて宗氏の島内支配に協力したばかりでなく、地頭代——守護代——守護という成長段階を通して宗氏が掌握した指導的立場から、漸次その勢力下に収められて、その家臣団に定着して行ったのである。しかも宗氏の勢力伸長には、一族の全島範汎が与って力があつた。これも対馬諸書の伝えるところによると、重尚入島の後、その兄弟下野二郎盛忠が佐護、右衛門三郎頼勝が佐須、越前五郎盛賢が与良、甲斐六郎盛家が三根の各郡を分治したとある。天文十五年に宗晴康が体統を正すために、宗氏支族にその土地の縁故によって改姓させたが、田中健夫氏は『対州編年略』によって、これら諸氏を八郡に分けて表示し、実に全島各郡に限なく三八氏に及んでいることを明かにしている。さらにまたその勢力扶植の過程に於いて、同族間の婚姻が頻りに行なわれていることは、仁位郡代盛家の妹が貞盛の弟盛国に嫁し、豊崎郡代盛俊を生み、盛家は貞盛の女を娶り、貞盛の妹は伊奈郡代盛弘に嫁している数例によってもわかるが、前述の大浦氏の例に見られるように、在地諸豪の懐柔策としての賜姓も多く、島内の宗姓を称するものの中にも、現実には

宗氏と血縁関係を持たないものが指摘されよう。『宗家判物写』によれば、貞盛の前後から官途受領や名字附与の書出が漸く多く、時代が降るにつれて加冠状が極めて多数現われて来るが、これら判物を与えられることは、家臣にとってその家格を権威づけることとなる反面に、宗氏の家臣統制の強化を裏書きするものであると謂える。

封建的主従関係を規制するものはいうまでもなく領地の宛行であり、換言すれば土地の収穫物すなわち米麦の給与即地方知行であるが、良田に乏しく農産資源に恵まれない対馬に於いては、この公式通りには行かない。宗氏が対馬に定着するようになったのは、貞茂が三根郡佐賀に館を営んだときからで、それまでは盛国・経茂いずれも筑前宗像郡に拠り、その本地は筑前・豊前・肥前の三前七郡に亘って所領を持ち、対馬には代官を置き、自らは常時に在島したわけではなかった。すなわち宗氏は北九州に於いて少武氏麾下の一大名であった。宗氏は累代少武氏に恩育されたという旧恩を棄て切れず、終始これと唇齒の関係を保ち、少武菊池両氏の抗争には、少武氏に属して幕府方に力を効くしたが、大内氏の勢力が北九州に伸びると、領土保全のためにも一そう少武氏との連繫を深めた。しかも少武氏の勢は漸く衰え、ついにはこれを対馬島内に包擁せざるを得なくなり、貞盛は少武嘉頼・教頼父子を援け、さらにその子頼忠<sup>○政</sup>を擁立して再三その失地回復に努めたが、文明元年に一時成功したに止まり、爾後は大内氏と提携することによって少武氏を見限り、明応六年頼忠その子高経が敗死して少武氏が滅び、永正三年には豆酲郡代宗顕茂が維持していた筑前三

笠郡の所領もその敗死とともに失い、その本土の領地は完全にその手を離れて、対馬一島に屏息する外なきに至ったのである。『宗家判物写』によれば、管見の限り、その最も古いものは、延文五年九月六日付肥前国神崎庄下八郷内田地五町を十郎兵衛に与えた経茂の所領預状であり、最も新しいものは大永二年二月十五日付津江右馬允に安堵した筑前国糟屋郡世々奈幾村三町の宛行状である。<sup>(四〇)</sup>その間約一世紀半に及んでいるが、この安堵状も事実支配を意味するものかどうか疑わしい。しかし陶山存の『考証録』に次の宛行状を収録し、これ程の知行高のものは破格であるから特に写して置く述べているが、最盛期にはこのような名田所領が北九州各地に点在していたのは事実のようである。今度のはたらしきについて、おんしようとして豊前之国きくの郡ますた百六十町遺置候、子々孫々にいたるまで不可有相違候、仍て状如件、

明徳二年十一月十五日

貞茂判

津江三郎左衛門尉殿

いま『宗家判物写』に収載された北九州に於ける所領宛行状を分類表示すると次の如くである。九州本土に於ける宗氏所領として、長沼賢海氏が『松浦党の研究』に載せているものと地名など若干異同出入があるが、寓目した判物写諸冊の異同に拠るものと思われる。

ところで嘉吉元年の本土敗戦は少弐嘉頼の対馬竄入をもたらししたが、これを契機として北九州の所領を失った家臣は陸統として対馬に渡り、島内の瘦地を以てしては、彼らを扶持することが困難であった結果が、土地以外の権利に基づく知行を与えて、その権利の行使から

『判物写』所載九州本土宗氏所領一覧表 (・印は少弐氏)

国郡名	名	田名	知行者	本姓	施行者	施行日
筑	嘉摩	駅家庄10町	宗右馬鬼房	木寺	澄茂	明德 3.10.20
	"	"	宗孫次郎	"	頼茂	応永 5. 4.27
	"	三緒半分40町	宗あはほう	佐伯	盛国	嘉吉 4. 3. 4
	"	鳥越井10町	俵右衛門大夫	俵	貞国	文明 1. 9. 3
	"	山野村小長ヶ跡 5町	赤坂主計允	吉賀	国茂	文明 2.10. 3
	"	" 大一丸名 8町	赤坂主計允	"	国茂	文明 2.10. 3
	"	高松30町	宗孫次郎	木寺	・教頼	応仁 1.10.28
	穂良	高松平三知行分	宗千法師	"	頼勝	応仁12. 4.27
	御牧	山鹿庄折屋郷内今富名9町4反	小宮四郎	小宮	貞茂	永享 4. 6. 1
	宗像	赤間内平等寺15町	宗中務丞	築城	職盛	文明 3. 6.17
	糟屋	山田庄10町	宗鬼房	木寺	澄茂	明德 3.10.20
	"	原田庄高松 6町	宗孫次郎	木寺	・教頼	応仁 1.10.28
	"	極楽寺分10町	俵隼人佐	俵	貞盛	永享 4. 4.26
	"	薊田半賀付24町	宗孫次郎	木寺	・教頼	応仁 1.10.28
	"	世々奈幾村 3町	津江三郎次郎	津江	貞国	文明 2. 8.22
	"	"	津江帯刀允	"	盛長	大永 2. 2.15
前	那賀	岩戸庄得王丸名 1町 4反	島山次郎	島雄	澄国	応永 7. 3.11
	"	住吉三郎丸名12町外	柴山次郎	"	真正	応永13. 6. 1
	"	志賀島宮司職	東月寺清藏主	・頼忠	応仁 3. 4.10	
	"	白水村	宗肥前守	佐伯	盛政	文明 2. 8. ?

国郡名	名	田	名	知行者	本姓	施行者	施行日
筑前	那賀	岩戸庄40町		古河山城守	古川	・頼忠	応仁 3. 6. 4
	席田	金隈屋敷12所		宗孫次郎	木寺	・教頼	応仁 1.10.28
	三笠	かわらたう田地1町		むまの四二郎	原田	(未祥)	永和 4. 8.25
	"	松茵仁町		島山次郎	島雄	資茂	応永11. 8. 7
	"	香椎須原上郷坊正行名		宗美濃彦六	佐伯	貞茂	応永 9. 7. 2
	"	観世音寺領光大寺住持職		普光寺		・頼忠	応仁 3. 2. 9
	早良	七隈3町		島山次郎	島雄	資茂	応永11. 7. 2
	"	山門庄弥三郎名		"	"	貞盛	永享 4. 4.22
	"	" 曲田名		御手洗又三郎	御手洗	貞盛	永享 4. 4.23
	"	" 150町上下代官職		宗左衛門尉	佐奈豊	貞盛	嘉吉 1. 6. 1
	志摩	田尻次郎丸名10町8反		宗六郎	松村	頼茂	応永 5. 4.27
	"	岩丸名		島山次郎	島雄	頼勝	応永12.11. 6
	夜須	名字地5町		古河山城守	古川	・頼忠	応仁 3. 6. 4
	"	熊井3町石丸8町		白水彦八郎	白水	貞国	文明 1. 9. 3
	下座	吉末名半分		宗六郎	中村	澄茂	永和 ? 11.13
肥前	"	杷木郷寒水3町8反		宗孫次郎	木寺	・教頼	応仁 1.10.28
	(未祥)	直木庄田地16町		島山次郎	島雄	澄国	応永 7. 6. 3
	"	井原庄		平山備前入道	平山	・教頼	長祿 2. 8.17
	"	稗寺津屋		島居美作守	島井	・政尚	文明 9. 7. 4
肥前	神崎	神崎庄下八郷田地5町		十郎兵衛	洲河	経茂	延文 5. 9. 6
	彼杵	彼杵庄田地5町		島山次郎	島雄	澄国	応永 7. 3.21
	佐賀	牛島村田地10町		俵都之吉	俵	貞盛	永享 4. 8. 9
豊前	企救	ますた160町		津江三郎 左衛門	津江	貞茂	明德 3.11.20

生ずる米銭を扶持し、士分としての格式を保持することによって藩の統制に服させたのであって、やがてこの中から御用商人的な業務に従うものが現われ、所謂六十人中町人と呼ぶ特殊な身分を持った一種の株仲間が成立するに至った。藤斉延が宗義蕃の下問に答えた『藤氏問答覚書』は、六十人中町人の起源を次のように説明している。

六十人者如何之謂にて候哉、

貞盛公御代嘉吉元年筑前・肥前等之御知行ヲ被失候故、彼地に罷在候御家臣之面々、多数御国を慕ひ罷渡候得共、田祿を被下候儀御座不被遊、他方江之任官を御免被成候ても出国之望無之、商売人となり御国江止度願候人六十人、則如願御許、御代官に等しく御取扱も有之者共に候

すなわちその成立の当初は六〇人であったところから、その名称ができたものと思われるが、家の断絶その他の理由で権利を失い、あるいはその後に軍忠の恩賞として新しくこれに加えられたものもあって、年代によってその数に増減があったようで、『六十士旧記』によると、附表Aの如く三〇人しかその名が明かでない。しかも朝鮮役後、宗義智がこれを再編して、更めて五二人を定めたが、旧六十人中の子孫とわかるのは、表Bの如く一六家で、これも文化七年には、上対馬町比田勝平山茂吉氏所蔵の『六十人中諸記録』によれば、目見得町人二六五人中、表Cの如く計三二人に減じている。

六十人中町人継嗣受権者一覧表

A 大永頃	伊丹宮内 宗兵庫 "三郎次郎 原田兵馬 藤権内右衛門 羽川宮内左衛門 熱海甚兵衛 齋藤平五郎	平山隠岐 梅野岡八郎 川尻右衛門	伊藤六郎 波多野正助 富谷采女 岡部権藏
B 慶長頃	中尾九郎兵衛 服部甚次郎 "伝次郎 齋藤十左衛門 "与次左衛門 "格右衛門 "与七兵衛 "源左衛門 平山新四郎 梅野左兵衛 "喜兵衛 渡島作右衛門 "善兵衛 "孫右衛門		
C 文化頃	服部源兵衛 "伝右衛門 齋藤惣左衛門 "格右衛門 "与七右衛門 平山忠兵衛 梅野喜兵衛 渡島道全 "源兵衛 "嘉右衛門		

A 大永頃	樋口大藏 陶山兵部 小谷小治郎 阿比留備中 魚比留孫六 青蓮寺藤六 串方能登 松尾吉内	小田林菴 牛方伯菴 立花竜介 釈雷藏主 山伏宝万院 牛方伯菴 雷藏主母	
B 慶長頃	樋口惣左衛門 数山次郎左衛門 生田次郎左衛門 阿比留利五右衛門 石田四郎左衛門 島井平之丞 串崎仁左衛門 橋辺判五郎 "又次郎 "又右衛門 "久右衛門 小田奎左衛門 "七左衛門 栗谷甚三郎		有田五兵衛 "藤右衛門 井手三郎兵衛 江島奥右衛門 "吉左衛門 "惣左衛門
C 文化頃	石田伊兵衛 橋辺正吉 "三郎右衛門 小田五郎左衛門 栗谷藤兵衛	有田吉十郎 江島惣右衛門	



A 大永頃	B 慶長頃	C 文化頃
	庄司増右衛門 " 勘左衛門 勝田作右衛門 住永与右衛門 " 与三兵衛 " 又左衛門 土田伊右衛門 " 藤六郎 " 藤左衛門 " 長左衛門 " 惣右衛門 " 市郎左衛門 好見伊右衛門 長島利左衛門 " 清兵衛 " 次郎右衛門 間永藤右衛門 " 甚右衛門 " 市左衛門 飯田七郎左衛門 朝野次郎左衛門 棧原惣兵衛 佐護伝右衛門 荒川徳右衛門 梶山忠左衛門 神崎長次郎	庄司十左衛門 勝田作右衛門 住永伊右衛門 " 五郎兵衛 " 平左衛門 土田伊右衛門 " 平左衛門 " 半蔵 " 藤左衛門 " 甚右衛門 間永甚七郎 " 甚右衛門 浅野藤兵衛 棧原惣七 神崎茂四右衛門

『宗家判物享』延宝書上町六十人中によれば、義智の代に六十人中に指定されたもの四五家、内三一家が表Bと一致し、さらに義成の代にこれに加えられた家柄八八人、柳川豊前守調興に従っていた町人二一人をも加え、義真の代にまた九人を加えて都合一六三家が頂戴した判物を所持しているが、この数字には旧六十人中のほか所謂これに準ずる格式を認められた六十人格が含まれている。要するに六十人中乃至六十人格は、特権知行を認められた目見得町人の仲間であった。

云うまでもなく米銭を直接収入源とする運上の多様化は、中世封建社会の経済的發展過程に於ける特色であるが、土地資源に乏しい辺境の孤島対馬に於いても、領主宗氏は島内資源をフルに活用するとともに、島民のあらゆる産業活動に課税源を見出し、特にその立地条件から海上活動には早くから着眼して、領内に出入する他国船に課税することは勿論——これは広く港湾所在の荘園領主がつとに行なっていたところであるが——島民の塩漁業を初め、島内在籍船の本土・朝鮮への通商貿易にまで課税した。古代から対馬島民は煮塩・浦魚・販売を以て營生の資としたと称されたが、そのいずれもが領主の課税源となったのである。しかも六十人中が成立する嘉吉の頃は、宗氏が対馬に定着して本格的な領国支配に乗り出した時期であり、恰も朝鮮との関係に於いても、前後して対馬島主文引の制度が創まり、歳遣船定約が成立している。島主文引制の確立は、朝鮮へ渡航するすべてのわが国貿易船が宗氏の文引を携帯しない限り、海賊船と見なして接待を拒否されることであり、島内船は勿論、本土の貿易船も必ず島内に寄港する

ところから、その積載貨物に運上を課するとともに、文引發給に對する手数料を徴収する機會を実現することとなり、さらに歲遣船定約は朝鮮貿易に参加する權利の發生を意味するが、この權利の集約によつて課稅源の維持増強に努め得たのである。『宗家判物寫』に収載された次の文書は、朝鮮への貿易品が對馬に於いて集散されたことを示して居り、朝鮮貿易權の對馬集約の可能性を裏書きするものである。

(藩主) (文) (請) (取) (荒) (解) (百) (兩) (座)

居り、朝鮮貿易権の対馬集約の可能性を裏書きするものである。  
 (端広)はひろ六十八たんにしかにうけとり候、あらかね四ひやくきん、六地より  
 (反) (請取) (荒銅) (百斤) (陸)  
 (渡来)とらひのとき、わたすべく候、仍為後日之状如件、

享祿三年正月廿九日

盛次(花押)  
(四七)  
 小田彦左衛門尉とのへ

さて宗氏の領国支配の根幹をなすこれら特権知行の実体について述べるに当って、担税者の所在に一言触れなくてはならない。担税者は、土地に限らず生業のあらゆる面に於いて、原則的に百姓・町人であることは論を俟たない。従つて百姓の逃散は領主の最も危惧するところであつて、『宗家判物写』には、道路普請の公事に関連して佐須の浦人が逃散したのに対し、阿連の百姓等の動搖を抑える措置を指示したた年次不明の某等連署状がある。<sup>(四八)</sup>

みねのこをりの百しやうの事、六ちにもわたらず、御くうしをも仕候はさ  
らんもの事、たれくかうちのものにて候も、かたく御くうしさいそくあ  
るへく候、いきせする百しやうの事は、うけ給てれうけんをいたく申へく  
候、恐々謹言、

二月廿九日

貞盛御判

ところで百姓・町人から税を取立てるものは宗家の家臣であつて、塩漁業を初め、名目は種々雑多であるが、船舶の往来に課する税もその支配海面に限定して、彼らがその取立てを行ない、取立てによる得分を扶持として彼らに給与されるのである。またこれとともに担税者が判物を給せられた家臣自身である場合がある。彼らが自己所有の船を出して通商貿易に従事するか、あるいはこれを商人に請負させた場合がこの例で、家臣がその商業行為に對し、自身が公事を負うことは、形式に多少の変化はあつても、中世以来、領国各地で行なわれて居り、対馬では六十人中町人のほか、多数の家臣や目見得町人がこれを行なつてゐる。この場合、扶持としてその課税が免除されたものが、公事免である。特権知行の判物には多様の書式があつて、土地宛行の判物と異り、本地・税地の区別がない文言が使用されるが、「知行不可有相違」「致扶持」は明かに給分宛行である反面、「指置」「有免許」「不可有子細」などは公事免の場合に使用されている。また「可被致沙汰」は給分宛行であっても、課税取立ての事務を勤めるもの、「預置」も同様宛行であるが、公事取立てを行なつたようである。一般に公事取立ての得分を取得することを所務と称したが、自身が担税者すなわち公事を負う場合、その行なう商業行為をも所務と呼んでいる。特権知行の最大なものは、朝鮮貿易に於ける文引発給の手数料すな

わち吹拳銭並びに歳遣船定約に基づく貿易権の取得であるが、島主すなわち領主宗氏のそれを国次、一般の貿易船は定約者の使送船ということで、送使と呼んだ。さて送使・国次を論ずるに当っては、『宗家判物写』から先ず土地以外の知行の内、特に海上活動に関連する判物をとり上げ、これに卑見を加えつつ、対馬宗氏の特権知行の実体を把握し、受図書・受職人の持つ貿易権の意義を強調したいと思う。蓋しこれによって中世に於ける対馬宗氏の家臣団の商人的性格が自ら解明されるからである。

註 (一) 『朝鮮成宗実録』卷一〇一成宗十年二月丙申

(二) 同書卷一三三成宗十二年九月丙子

(三) 『内山家文書』九州大学九州文化史研究所架蔵影写本に拠る。原本の所在は明かでない。『宗家判物写』貞享書上馬廻内山清右衛門所持

(四) 『宗家判物写』延宝書上伊奈郡下里村奴田次郎兵衛分

(五) 『山上家文書』長崎県下県郡豊玉村仁位山上睦氏所蔵。『宗家判物写』享保書上仁位郷仁位村山上判兵衛所持

(六) 『三根阿比留家文書』長崎県上県郡峯村三根浜阿比留学氏所蔵。

『宗家判物写』享保書上三根郷三根村百姓字左衛門所持

(七) 『河内大浦家文書』上原郡上対馬町比田勝大浦博道氏所蔵。『宗家判物写』享保書上豊崎郷河内村大浦貞之進所持

(補) 『万要覚書』にもこの数字を載せている。反別内訳は畠木庭二、〇九七町九反一畝九歩、田は二九〇町一反八畝六歩である。

(八) 間尺は寛永の宛行状にすでに見えている。『宗家判物写』貞享書上歩行田中与右衛門所持寛永十三年四月八日付田中甚内宛宗義成判物

(九) 『口上覚書』(『日本経済叢書』巻四所収に拠る)

(一〇) 『口上覚書』によれば、正保三年の麦物成内訳は粳五合摺二〇二石余、麦七合春四、一〇四石余とある。伊東多三郎氏「対馬藩の研究」『歴史学研究』九七号四七頁)に『万要覚書』を引用して、物成高麦六、七一八石一斗六升五勺六才、内訳畠木庭方五、五八五石二斗五升八合二勺九才、田方七六九石七斗三升九合八勺六才、茶椿盛方三六三石一斗六升九合四勺一才、そのうち公領分は四、一二五石一斗四升八合六勺三才、別取立一八〇石九斗八升九合六才の数字を挙げている。

(一一) 『財用問答』(『日本経済叢書』卷一三所収)。註(一五)の『御印判使阿比留伝右衛門江被成御達取調差出候写』によれば、対州一円の物成米三八四石余、麦五、九四八石余であり、小物成運上は現銀四三貫四〇〇匁余、浜出運上銀三六貫目、浦々漁事運上銀三九貫三〇〇匁その他である。佐須鉱山稼行の銀は灰吹銭として銀座に積出され、運上としての現銀とは全く関係がない。

(一二) 九州大学九州文化史研究所所蔵

(一三) 長崎県上県郡上対馬町小鹿扇浅太郎氏所蔵

(一四) 『天竜院御真蹟写註解』滋賀県伊香郡高月町雨森芳洲書院所蔵

(一五) 『寛政十年御国田代朝鮮之儀につき田島監物殿が御印判使阿比留伝衛門江被成御達取調差出候写』東京大学史料編纂所々蔵(旧南葵文庫蔵宗家記録)

(一六) 『当時公貿易并朝鮮御商売御利潤銀凡考之積帳』国立国会図書館所蔵によると、渡海料は漂民巡差使を除き、年条八送使については、四七四俵七斗九升二合七勺三才となっている。尤も三年間の平均値と断わっている。

(一七) 同書によれば、公木四〇〇東の代米一三、三三三俵一斗七升五合とある。わが対馬側の記録では、朝鮮の石を俵で換字している例が多

く、『和交寛』上には「石は俵也」とあるが、京枴の数値と近いからであろうか。本文の換算は醴泉院所蔵の『諸寛書』に拠ったが、文化三年の『問答寛書』によると、

御尋 朝鮮が米を御取寄被成候由、左様にて候哉、

御答 年分米豆百俵つち致音物候以外に無御座候、尤換米と申、五斗

入俵ニメ白米一万六千俵年分取入申候、是は音物に公木を差送候内米に換申候、依之、右之米を公作米と号申候、

御尋 換米と申者、何様之御音物を被遣候て入来候哉、

御答 約条に付、年分銅・水牛角等差渡候付、其返物に公米遣候故、

其公木之内、四百束を以、白米一万六千俵に換、相請取申候、とあつて、公作米は白米八千石と云うことになる。

(一八) 註(一五)の記録によると、鷹子換米は白米一、八一七俵二斗六升と記録されている。この数値は別幅求請の物換米を含んでいると思われる。尤も公貿易の総額は、白米一五、五六〇俵余、大豆三一七俵余、小豆一三俵余、公木六六四束四五足余と記している。

(一九) 『朝鮮貿易を加歳入高凡積公利御貿易ニ属及諸入費』国立国会図書館所蔵によれば、館守以下和館関係の人員費は一七、八六三兩永一九八文九分で、その他の諸経費は都合四〇、一〇五兩永八八八文七分五厘であった。石に付八兩八朱、米五、〇一三石二斗三升六合二勺一才を要したわけである。

(二〇) 『田代寛書』長崎県下県郡厳原町日吉厳原町公民館所蔵

(二一) 小林肇氏『対馬領田代寛書』八七頁所引史料

(二二) 文化七年『問答寛書』によれば、田代の所務は米七、八四一石六斗八升一勺、一俵三斗三升入として俵にメめて、二三、七六二俵二斗二升一勺、大豆二〇九俵余、大麦四三九俵二斗二升余、小麦一〇八俵一斗

六升余、正銀五貫九四五匁余、大銀二貫五七七匁余とある。寛政十年問答控では肥前田代の収納米七、七八七石程、運上銀五一貫六〇〇匁程と記している。

(二三) 『肥前国基肆老郡養父半郡鄉村敵高帳』長崎県下県郡厳原町国分万松院宗家文庫所蔵によると、小物成は米二一八石七斗六升二合、麦二〇三石五斗六升七合、苧麻六〇貫七〇〇匁、諸運上銀子一五貫三四二匁となっている。

(二四) 『諸寛書』長崎県下県郡厳原町天道茂醴泉院所蔵によって計算した。

(二五) 同右醴泉院所蔵。伊東多三郎氏は前掲論文『歴史学研究』九七号)五五頁で『口上寛書』によって知行高六間二尺、石高に直して百五十石取の藩士の所務を計算し、現米二十二石であったのが、義真の禄制改革後は現米三十四石五斗となったと藩士の所務の漸増を説明しているが、これが全知行高増加の一因となっていると云う極めて綿密な論述である。それについては、寺田市郎兵衛の記した『稟禄志』が寺田家文書記録(厳原町宮谷阿比留竜雄氏所蔵)にあり、詳細なデータを提供している。

(二六) 長崎県下県郡豊玉村唐洲阿比留政信氏所蔵

(二七) 平野隆氏『朝鮮貿易と対馬藩』『歴史学研究』第六卷上九六―八頁の作表は、国立国会図書館所蔵の同記録によったものと思われるが、輸出額とあるのは輸出貿易品を銀に換算した数字で、現銀の輸出货量を示したものではなく、また貿易利潤とある数字は輸出品だけの利潤で、輸入品もまた国内販売によって利潤が挙げられることを等閑視している。また看品とは公貿易に於ける物品の抜取検査のことで、私貿易では行わないところから、転じて公貿易の謂であるが、これを公貿易における物換品と誤解し、同論文九三頁に「貿易品も金銭の支払ひでなく物換に行

はれていた」と述べているのは誤謬も甚だし。

(二八) 文化七年『問答覚書』に、義真の頃は貿易利潤銀一二、〇〇〇一六、〇〇〇貫、現石に直し二〇〇、〇〇〇石余とあるのは必ずしも誇張ではない。米一石銀六〇匁とすれば、確かにその数字になる。『土芥冠鑑記』卷三四宗対馬守義真条には「朝鮮国の諸運上、米一石ニ銀子一枚積ニシテ、四ツ秤シ、凡十万石ニ及フト云々」とあるが、これは元禄三年の記述である。『賀島兵助言上書』に毎年二、五〇〇貫、凡そ十二万石の所務とあるのは、御国田代の物成を含んだ数字で、朝鮮貿易の利潤は十万石に及ぶと見てよい。ただしこれが銀二、五〇〇貫と云うのは、数値に誤りがあり、五〇六、〇〇〇貫にはなった筈である。この銀高は輸出品の利潤で、輸入品の販売利潤は計上されていないようである。これが文化の頃になると『問答覚書』に(c)国田代收納高、朝鮮所務銀米合せ八七、〇〇〇石とあり、これから内訳の下賜金一二、〇〇〇兩即ち銀七三〇貫、米一三、〇〇〇石を差引き、国田代收納高三五、〇〇〇石は(d)田代朝鮮到来の米と国收納の麦を米に直し、四五、八三〇俵とある数字から見ても、朝鮮からの輸入米が加算されているものと解釈し、これも差引くと残り三九、〇〇〇石程となり、銀高に直すと二、三〇〇貫余と云うことになり、貿易利潤が大幅に減じていることがわかる。これは全く私貿易の断絶によるものである。

(二九) 朝鮮人参は、わが国では特に高貴薬として珍重され、森克巳博士「近世初頭における対馬宗氏の対鮮貿易」(九州大学九州文化研究所紀要『第一所収』)によれば、享保十年頃、朝鮮から一斤銀一貫五〇〇貫で仕入れたものが一斤四貫目で売捌かれ、約二・六倍の高値で取引されたが、実際は十倍以上の巨利を収めたらしく、抜荷が殆ど人参の密貿易であったことでも、その利潤の大きかったことが窺われる。陶山存の『潜商

之儀被仰出書』も人参専売の利潤の莫大であったことを説いている。ところで人参は礼單(封進に対する回賜)求請させて三二斤八両で、私貿易によってこれと同数近く買付けられていたが、私貿易断絶後は一二〇三斤が輸入されるだけとなり、天保三年に水牛角四〇〇桶が熟銅三、〇〇〇斤に換物する約定が結ばれたとき、未収解消のため一一斤を現参、残余は単参一斤価銀六二〇兩の計算で、一部は上銀、一部は代銀入送することとなった。すなわち一斤の価銀一二〇三貫となり、昔日の利潤はも早や期待できなかったわけである。

(三〇) 『斎藤氏系譜』長崎県下県郡厳原町今屋敷斎藤定樹氏所蔵

(三一) 『斎藤家文書』同右所蔵

(三二) 『大山小田系図』厳原町天道茂醴泉院所蔵

(三三) 『大山小田家文書』厳原町田淵庄司シナ氏所蔵。『宗家判物写』享保書上

保書上

(三四) 『大浦系図』長崎県上県郡上対馬町比田勝大浦博道氏所蔵

(三五) 『扇氏世系』上対馬町小鹿扇浅太郎氏所蔵

(三六) 『洲河家文書』上対馬豊洲河生虎真氏所蔵。『宗家判物写』貞享書上豊崎郡豊村須川万右衛門所持分、元弘三年八月十日付沙弥了心着到状

(三七) 『長野家文書』長崎県上県郡峰村志多賀長野実氏所蔵。建武三年七月十日付足利尊氏感状写ほか。『宗家判物写』享保書上三根郷志多賀村足輕長野善八分建武五年三月日付長野助豊軍忠状ほか

(三八) 田中健夫氏著『中世海外交渉史の研究』九九頁

(三九) 『宗家判物写』延宝書上伊奈郡中久留瀬村財部三郎介分

(四〇) (四二) 『宗家判物写』延宝書上町中津江藤右衛門所持

(四一) 『考証録』長崎県上県郡峰村三根松村国智氏所蔵

(四三) 長沼賢海氏著『松浦党の研究』二〇二―五頁

(四四) 『藤氏問答覚書』 韓国国史編纂委員会保管宗家文書古記録

(四五) 『六十土旧記』 長崎県上県郡上対馬町比田勝平山茂吉氏所蔵

(四六) 『宗家判物写』 延宝書上と『六十土旧記』(附表B) と比較する

と、義智の代に六十人中となったものの内、前者にあって後者に脱しているものは、阿比留伊左衛門、同源左衛門、同惣右衛門、同弥右衛門、同平左衛門、脇田庄左衛門、同三郎右衛門、同半介、同権十郎、梯七郎

右衛門、同七左衛門、西尾三郎右衛門の一二人である。また義成指定の六十人格には大黒屋助左衛門の如く屋号を称した明らかな商人が居る。

(四七) 『宗家判物写』 享倍書上三根郷志多賀村百姓甚三郎所持分

(四八) 『宗家判物写』 延宝書上佐須郡阿連村浦人分九月二一日付某々連

署状

(四九) 『宗家判物写』 延宝書上馬廻久和弥五左衛門所持

(五〇) 『宗家判物写』 の成立及びその史料性格については、拙稿「宗家判物写管見」(『国士館大学創立五十年記念論文集』所収) 参照。

## 第二節 所務知行の内容的分類

対馬宗氏がその家臣に扶持した中世の所謂特権的所務知行のうち、海上活動にその権利の発生源を持つものは、(一)山手・木手 (二)錠公事 (三)一俵物 (四)二帖畳 (五)船の売口買口 (六)人の売口買口 (七)塩判 (八)おうせん判 (九)吹拳銭 (一〇)国次 (一一)送使である。以下順を逐って卑見を加えることとする。

### (一) 山手・木手

木手は「切手」とも書かれているが、旅行者が査証のための公驗として携行する手形の意味での札券を別にして、恐らく単なる借字であろう。『建武以来追加』諸国守護人非法条々に、

一、構新関、号津料、取山手・河手、成旅人煩事

とあって、その徴収を禁じた措置が見えるが、中世に於て諸国守護人はじめ荘園乃至封建領主が要地に関所を設け、ここを通過する人又は貨物に課した関銭の一種で、陸路のものが山手、河川の要津に於て徴したものが河手であろう。手は手数料の意味であること勿論である。

対馬の判物類に現われた山手は、「国中にての木て・山て」(一)「船の山て」(二)などあって、一見島内に於ける運上と海上活動に関するそれと

区別されるが如くであるが、前者はその支配地すなわち課税地域、後者は單純にその賦課対象を指称したものである。船の山手は、島内各浦に寄港する船舶が使用する薪・材木などに課した運上の謂と考えてよからう。その一例を掲げると、

対馬嶋興良郡内、久田かしの山手御公事等事、給分面々代官相ろん之間、  
先日くしをき、任先例可被沙汰状如件、  
(公事關) (審推) (論)

応永十二

貞茂 御判

九月廿三日

田原隼人佐殿 (三)

この山手の課税物件内容は国府<sup>原</sup>に近い久田村の樫材であるが、『敵原藩御壁書控』延宝五年正月二日付事書に、

商売船田舎へ罷下滞留之内、薪取之候ハハ巷足に付、五分宛山手取之可申事

とあって、この場合の山手は新材搬出の運上であることがわかる。後掲『宗家判物写』享保書上豊崎郷五根緒村糸瀬幾左衛門所持天文廿三年八月廿二日付糸瀬播磨守宛宗義調書下によれば、塩竈の公事免の代償の形で、山手として塩十俵が課せられている。

また木手についての内容を窺える判物は寓目しないが、同書貞享書上佐須郡久根浜村百姓四郎兵衛所持の判物に、

成職御判

対馬さすの郡くねのはまのたくみ孫次郎、そのをやおうちより御内の物たるあいた、せんく<sup>(先々)</sup>の御判のむねにまかせて、山て・くわて、又はやまの事、とれにても木さいもく<sup>(材木)</sup>の事、とらせらるへき状如件、

長禄二年正月晦日

宗右馬助

盛直判

たくみ孫次郎か所

とあり、一般に山手と并称される木手が桑手と呼ばれ、課税品目が一層はつきりしている。しかし木手・桑手が山手とどの点で区別されるかはわからない。山の事とあるのは、入会権に関するものと思われるのは、同じく判物に、「さて・山て共、立入之公事、不可有子細」という表現がある。また『黒瀬平山家文書』に

代々御せいはいの旨にまかせて、城山四方の事、こはをきり、ふなくそ<sup>(成敗)</sup>足<sup>(薪)</sup>、たき木をさる事、大にこころへさる事也、この旨をそむき候するとも<sup>(心)</sup>得<sup>(得)</sup>、<sup>(手)</sup>鶴<sup>(尾)</sup>、上より御さいくわあるへき所なり、此内、平左衛門かはいとく<sup>(相違)</sup>の所、いもさき・おさきの事は、前々のまゝさ<sup>(相違)</sup>をいあるへからさる状如件、

文明八

十二月廿一日

くろせ

左衛門三郎所<sup>(五)</sup>

とあって、守護宗氏が入会権を掌握して居り、材木の伐採は船材及び薪の搬出を目的としていることがわかる。これら入会並びに材木搬出の運上取立てがそのまま給分として宛行われるわけである。前掲事書に、商人が田舎即ち在方に行ったとき木手を徴する例として、

在郷へ罷下候商人宿いたされ候て、為木銭一日壹分程請取可申候、尤旅籠宿仕候は、夫に応じ代物取之可申事、

とあり、島内商人の宿泊に対しても木銭即ち木手を徴収したことが知られる。近世の木賃宿がこの語源から出ていること勿論であるが、炊飯のための薪代という意味で宿泊料に加算されたものと思われる。この場合は、ともかくも通行の商人が担税者であった。近世の旅行者が携帯する切手・手形とは性格が全く別のものであるが、対馬に於ては、在方の田舎に廻る旅船に浦奉行が切手銭を徴し、他国の旅商人が長期に亘って逗留するときは、蔵屋敷から添切手を交付した。元禄六年五月二日付郡奉行が触れた『八郷正之御壁書』によれば、

一、切手にて往来之衆、たとえ見知りたる人にてても切手之御印判相改め、相違無之候はは人馬急度相出す可し、付たり<sup>略</sup>其外商人往来之時は、切手に人数を引合せ之を改む可し、船手形にて陸地往来の儀停止せしめ候間、弥念を入れ可申候、若切手無之者罷通り候はは、召浦り村送にして府内へ差登す可し、勿論田舎船出船の刻、切手無之者便船致させ申間敷事、とある。これは所謂木手ではない。





へく候、ゆめ／＼ふさたのきあるましく候、恐々謹言、

永和五

二月九日

澄茂 (花押)  
宗与三さへもん殿

(唐高麗) 渡人別公事、いつ方よりもふさたに候あいだ、(船頭) せんとうのさ  
た(悉)としてのり人(何)なんしんとし、と(何)のへ候てまいらすへきよしおほせ  
あるへく候、人の中物とかうし、御公事いけの事、これより御めんなから  
んはかは、さたあるへく候、もし御公事ふさたに候は、せんとうにあい  
かけさたあるへく候、恐々謹言、

五月廿二日

澄茂 (花押)  
宗与三さへもん殿

この二通の判物によって、船公事は船別・帆別の外に、乗船者の人頭別課税の場合があり、その担税者は船頭即ち船長であったことがわかる。錠公事といい、帆公事といい、さらに人別公事というのは、徴税基準の別だけで、税の種目は同一であり、従って重複して課税されたわけではない。

### (三) 一俵物

船公事の主体をなすものが一俵物である。判物には「ふねの一へう物」(四)「六地之一俵物」(五)「陸地一俵物」(六)「高麗一俵物」(七)「唐土之御夫用等」(八)「かうらい六地へはたらき候するふねの一俵物」(九)などと種々な辞句で表現されているが、『藤氏問答覚書』は、陸地高麗の一俵物として、

次のように説明している。

陸地と申は、豊前・豊後・肥前・筑前・筑後之六国を申、高麗は則朝鮮国致革命候ても、古称にて高麗と称来候、一俵物と申は、九州・朝鮮之商賈船より米穀何十俵に付何俵と運上を取候儀を申候、此俵も慢には所務不相成候、御判を以、扶助に被仰付候、陸地之諸州より高麗に渡す歳船も一俵物とて、当国に運上を出申候

これによると、先ず、(a)陸地とは豊肥筑前後の北九州六箇国を指し、(b)一俵物とは九州・朝鮮に往来する商船——ここでは概念的に島内在籍船を指したものであらう——の積荷に対する着津時の従量課税であること、(c)その運上が米穀であり、さらに(d)九州から朝鮮に渡航する島外船に対しても寄港時に課税したことになる。

(a)陸地は「ろく地」「六地」など借字音訳されているが、陸地即ち本土という意味で、六地という字句にこだわって豊肥筑の前後六箇国を指すとするのは当らない。「陸地之書」という辞句については別途解説するが、これには日向・大隅・薩摩の歳遣定約受図書人も含まれて居り、杵岐・対馬二島を除く九州全土の総称と解すべきであらう。

判物によれば、「陸地」は石見・若狹と明確に区別されて居り、また明らかに肥前を指称しているものすらある。また(d)朝鮮に渡航する九州の商船に対して課税したというが、『勘仲記』弘安十年七月十三日条によれば、唐船即ち海外渡航船が対馬に着岸すると、その積荷に対する点定上納という所謂関税権が認められ、その権利の行使について守護人と国衙が争って、得分の両者折半の上裁を申請した対馬守源光

經の解文を載せて居り、ひとり貿易船に限らず、一般の回船商人も全国の関津に於いて津料・目銭・交易上分など様々な名称で所在封建領主から課税されたことは、既に相田二郎・森克己博士らの研究があり、しかも対馬商船もその例外でなかったことは、次の『六十人中平山家文書』によっても窺われる。

対馬船事、上下向著関之時、有限帆別御公事者、可勤之、其外船中不可有  
点検由候也、仍執達如件、

文安五

九月廿八日

秀家 (花押)  
道行 (花押)

長州肥中

関奉行所

筑前・肥前津々関々船公事已下事、所免許也、仍之状如件、

康正三

七月十日

平山備前入道殿 (三三)  
(花押) ○少式  
教類

ところで対馬宗氏が島内で行なった課税事実を示す最も古い判物は、

公事免の形をとったもので、即ち、

からうらわたり (高麗渡) の大山ふね二そうのくうしの事、さしおき申所如件、

正平廿四

七月五日

宗慶 (花押)  
大山宮内さへもん殿 (二三)

であって、高麗末期に半島に渡航した与良郡大山村在籍の二艘の貿易

船が宗経茂から課税を免ぜられたことがわかるが、これに関連して、次のような判物がある。

つしまの (対馬) しまたの (島和巴) 浦の (高麗) こうれいの (給分) 御くうしの事、きうふんとしてあて給

るところ也、御かき下のむねにまかせて、ちきようすへき状如件、 (知行)

永和二

十月十六日

澄茂 (花押)  
大山左衛門五郎殿 (二四)

つしまのからうらい御公事、先立申てうまゝ、さたあるへく候、先立分もふ  
さに候、給所候はゝ、先日任書下旨、可被致沙汰之状如件、

康応元

九月廿七日

澄茂 (花押)  
大山左衛門五郎殿 (二五)

つしまの嶋の八かいのからうらいくうしの事、事かきの旨をまはりて、来む  
まのとしまで、ふさた候はす、さたあるへし、恐々謹言、 (寺)

十一月七日

澄茂 (花押)  
大山のさへもん五郎殿 (二六)

これによれば、高麗に渡航する大山船の発船地は与良の和田浦であり、永和二年にはその公事が給分として小田氏に宛行われたが、島内に寄港する商船は内外を問わず、和田浦に於いてもその公事を徴収するものであり、来午年即ち元中七年 (明徳元年) までに取立てるよう催促している。宗氏が李氏朝鮮政府の厳しい貿易統制を背景にその与えられた特権をフルに利用したことはいうまでもないが、それ以前から高麗

への渡航船に課税していたことが理解される。しかし文明末年から延徳・明応年間に漸く決定的となった朝鮮貿易の対馬独占過程に於ては朝鮮渡航船はことごとく島内船かその売船でなくてはならないから、九州から朝鮮に渡航する他国在籍船というものは皆無の筈である。

(b) 島内船も帰港時に限らず、出港時に於いても課税されたものと思われる。すなわち今日の関税的性格とは全く異質ではあるが、輸移出税があり、輸入税もあつた如くである。「陸地高麗のあきないぎてうの舟の公事」は明かに輸入税であるが、「かうらい六ちへはたらき候するふねの一俵物」或は「六地にわたり候時の一俵物」は輸移出税と判断される。さらに森克己博士は論文「中世末近世初頭における対馬宗氏の対鮮貿易」で貿易品に対する課税が米穀を以て徴収されたので、これを一俵物と称すると説いているが、俵物は米穀に限定しない。『宗家判物写』には、代物納に銀子・木綿の外に「麦之俵物」を挙げた判物があり、米麦を「一石物」と呼んだ例もある。また『宗家判物写』延宝書上町中津江藤右衛門所持応永三年十一月卅日付津江兵衛四郎宛宗貞盛書下に「高麗一俵物」とあるべきところ「唐土之御夫用等」と書いて居り、その内容がよくわからなかったが、文明十五年八月十一日付津江右京亮宛宗貞国書下では、その個所が「にんふ用途」と改めてあり、朝鮮に積出される俵物の包装費用とも考えられる。のみならず高麗一俵物は「高麗のしほあきないの御公事」「しよの一俵物」「しほふねの一へうもの」などの名称を用いた判物があつて、塩の俵積が少なくなつたようである。一俵物が積荷の従量課税

であると解釈するならば、米穀に限つたわけではない。しかも対馬が米麦を領外に移出することは到底考えられないので、米とするならば当然移入の積荷でなくてはならない。ただその課税が原則として米穀で行なわれ、銀子・木綿が代納されたことは云うまでもない。

俵物とは、俵で包装した物ということから出た成語に相違ない。対馬では古来煮塩・捕魚を主たる生業としたから、米麦の外に漁塩業の生産加工品や一部農産物を乾燥して俵装したのである。ところで近世長崎に於ける中国貿易では、銅産の減退後、俵物が脚光を浴びたが、その俵物というのは煎海鼠、干鮑のことで、明和元年から饒鯨が加わり、これを俵物三色と呼んだ。朝鮮貿易は慶長復交後、己酉約条の締結によって公貿易は定量貿易に癒着し、私貿易は輸出品たる銀・銅その他南方物資の調達難と輸入品中の最大魅力であつた薬用人参の減産・悪化によって全く発展性を失つたので、対馬府中(厳原)藩は中国貿易に眼を著け、島内農海産物移出統制を行なうために俵物方を設置し、島民が漁撈した海鼠や鮑を煎海鼠や干鮑に仕立て、俵物としてこれを買上げ、俵物一手請方を通じて長崎に積出した。また近世には俵子運上銀という税目が対馬にあるが、島内諸浦から積出す統制外の干鰯・椎茸・木海月などに課し、浦奉行がこれを取立てた。前掲『年行司并町人御返答書』によれば、諸浦から移出される俵物は、椎茸は百斤につき銀七匁五分、木海月は百斤につき四匁五分の運上銀が課せられている。しかしこの種の俵物は中世史料ではまだ寓目しない。

さて中世の対馬は、煮塩・捕魚と共に商販が主要な生業であつたか

ら、商品物資の移出入を積極的に行ない、物資の流通を規制する所謂津留などがなく、寧ろ流通過程に於けるその運上が大名宗氏の財政を潤おす大きな財源でもあった。これらの公事が知行の対象となり、その知行には自己が負担すべき公事を免除されるもの即ち公事免と徴収した公事の得分を扶助される即ち所務の給与とがあり、前者は「差置く」或は「闊く」と呼んだが、いずれも給分として宛行われた知行であった。

一、筒はま舟公事一あん(豆殿)に可有沙汰之事、(略中)

右此前、如先々為給所宛行之者也、仍此旨可被存知之状如件、

大永二年

五月五日

盛 長 御判  
(三五)  
宗右衛門大夫殿

佐奈豊村事、任成職様之御判之旨、此内三ヶ所屋敷内之船之公事等之事、於以後無相違可有成敗候、并彼居屋敷居候する者、点役郡役已下事、以前儘不可有無沙汰之状如件、

明応参

十二月廿九日

材 盛 御判  
(三八)  
宗安房守殿

(根緒)  
西泊中越五ねう三ヶ所ちけ船の高麗一俵物の事、為給分宛行所也、古殿御判のまゝ知行不可有相違状如件、

永享三

九月十日

貞 盛 御判  
(三七)  
財部掃部助殿

これらの判物例によれば、船公事の宛行は、公事免も加扶助も、土地宛行と全く同様に島内の一定地域を限定し、その地域内の権利行使を認められて居り、次の判物では具体的に、その地域内から発着する船隻に適用されたことがわかる。

(与良郡)  
つしまの国よらのこほりの内、(土寄)  
つちより三ヶ所村よりかうらい・六地へは  
たつき候するふねの一俵物、同木手・山手・下人立より之事、為給分宛行所也、任先例ちきよういたされへき所之状如件、

応仁元

九月廿九日

貞 国 (花押)  
(三八)  
草鹿部平次郎殿

またこの公事免知行には年紀があるものがあり、

梯源左衛門尉船諸公事、当年より五ヶ年間さしをく所之状如件、

文安三

六月廿九日

貞 盛 御在判  
(三九)  
宛名無之

これは売船即ち他人に権利が異動した船隻に対しての措置と考えられ、自己所有船について年紀がないことは、上掲判物と関連する次のもので理解されよう。

ふねのうり口かい口、しほはん、一へう物、二てうたゝみ、さきの源さえもんの時のまゝ、ふちいたすへく候、われともち候する船はかりにて候、仍状如件、

享徳二

八月卅日

成 職 御在判  
(四〇)  
梯大藏さへもん尉殿

自己所有の船を特に指したものは、

我ともち候船の一へう物の事、任先御判旨、致扶持者也、仍此由可被存知之状如件、

寛正二年

三月六日

成職(花押)  
(四二) 宗彦八殿

また本土・朝鮮への渡航を自己所有船とする時と借船で行う場合、後者の公事免は半公事であった。

ろくち・高麗の津の舟の公事のこと、其はかもろくの公事等、さしおき候なり、たし人のかり舟のときは、はうの公事かるべく候にて、為後状如件、

長禄二年

九月廿二日

成職(花押)  
(四二) 東月寺

一、峰郡けしやうてん之内、就相拘毎年四百廿文并李貳斤之事、

一、他国罷渡帰島之時、借船之儀、不寄大小、半公事之事、

右依訴、有免許之処也、仍不可有相違之状如件、

天正八

十二月四日

昭景御判  
(四三) 阿比留民部承殿

#### (四) 二帖畳

判物には一俵物と並記されている場合が多く、「二てうたゝみ」(四四)「二

条畳」(四五)或は単に「たゝみ」(四六)などと書かれている。税目の称で、一俵物

と同様やはり貨物税であろう。対馬に於いては畳表は奢侈品であった。公事免の対象となるものは、勿論移入品であったと考えられる。

前掲「年行司并町人御返答書」によれば、畳表は多く上方筋・備後鞆・筑後・肥後などから移入された。「二てう」とは畳の数を云うのか或は産地・用途その他による名称なのか明かでないが、『八郷江之御壁書控』延宝五年正月二日付「百姓之年中行事及掟」の中に「居なしの事」(四七)として、畳は一人に一帖当とし、外に二帖という制限が設けられている。名称の出所もこの辺にあるのではあるまいか。また『日本林制史料』敵原藩所収の『八郷江之御壁書留』元禄六年五月壁書によれば、

一、田舎鋪畳之儀、上方畳已前より有来候は、損候迄用候儀にと仰付られ候得共、数年之儀に候故、最早損し捨り可申候間、向後古来より仕来候田舎拵えのい畳・かや畳、之を用う可く候、給人家は七島畳鋪候儀、心次第可仕事、

とあり、七島畳は薩摩産で、前掲『年行司并町人御返答書』によれば、延宝の頃、府内船問屋佐野屋六左衛門が移入し、十枚につき代銀八匁であった。

#### (五) 船の売口買口

判物には殆ど「人の売口買口」と並記されている。『藤氏問答覚書』によれば、

船之売口買口の事

一、船の売口買口と申は、南は九州の地、西は朝鮮へ罷渡致商賈候船之儀にて、此船は富饒成人にても慢に商売不相成、功士之賞に被仰付、随分御恩賞之事共に御座候、其故は売船名主に成て町人を遣候時は往返一度何程つと運上を取候事扶助被仰付たる事、且又我と自力にて遣候得は、尚又之儀に候、此船を売買仕儀御免は無之者不相成候、尤家々に持来候送使船を他人に売渡候事も無御免家は調事不相成候、此筋実は六十人に賜り候御扶持に候得共、依家は田禄を頒候へは、格別之御恩賞被成下候、

とあつて、甚だ要領を握みにくい解説であるが、前段では先ず(1)本土・朝鮮に往来する商船は、その渡航の権利は功臣に対する恩賞として扶持され、いかに富裕な人でも領主宗氏の許可なくては渡航できないことを説明している。朝鮮貿易に於いては、島主歳遣船即ち国次船と受職人の親朝及び受図書人の送使船がこの権利の対象となること云うまでもない。次に(2)これらの商船は、もとより権利取得者が自力で渡航させることができるが、この権利を売渡し、売船名主となつて町人即ち純然たる商人を遣わす場合は、往復に一回何程宛の運上を取立て、これを得分として加扶助するもので、この場合にその船の権利の売買は、認可を必要とし、特に朝鮮貿易に於ける送使船については、他人への譲渡はその認可を嚴重にしたと説明し、最後に(3)商船の本土・朝鮮渡航権は、所謂六十人衆に賜つた特権であり、一般に田禄を賜つた家臣としては格別な恩賞であると述べている。(2)の売船認可が嚴重に行なわれたことは、次の判物でも知られよう。

(浦英)  
うらのはまの二郎さへもんふねの一へう物の事、あつけおく所の状如件、

永享十二

十月十日

貞盛 御判  
宗太郎左衛門尉殿

この預状の二郎左衛門船は売船と思われるが、長禄四年二月廿二日付宗豊前守宛宗成職預状によつて安堵されている。(四九)

宗(肥前)せん方の船之事、めん／＼(面々)きやうたいあい(兄弟)にめされへく候、りやうし(諒承)ようにて候、其分心へあるへく候、恐々謹言、  
年号無之(五〇)

(根三)  
賊船御公事等、根神目大隅守乗船一そうの事、先任御判旨、有御免者也、  
仍任先例致其沙汰如件

寛正式年

十二月七日

成職 御判  
俵隼人佐殿

これも文明四年九月二日付俵長門守宛宗貞国書下によつて安堵されている。(五三) なお賊船公事とある賊船は、朝鮮貿易に於ける約定外船隻の意であつて、朝鮮政府は対馬宗氏の文引即ち渡航証明書を携帯しないこれらの船隻が慶尚道加徳島以西の海面に出没すると海賊船を以て処置することを声明していたからである。

ところで『問答覚書』の説明では、船の売買の公事免の実体を把握するに充分ではない。船の売口買口は、勿論船の渡航権の売買であるが、その公事は売買兩人に賦課したものと思われる。往返一度というのは、渡航と帰航のいずれの時点か不明であるが、恐らく兩人が各々

そのいずれかの時点で徴されたものに違いない。これを加扶助するというのが公事免である。船売買の判物で最も古いものは、『宗家判物写』享保書上「仁位郷」永徳二年十月十三日付宗澄茂書下である。<sup>(五三)</sup>宮本又次教授は論文「対馬藩の商業と生産方」で船の売口買口を單純に本土・朝鮮に渡航する商船そのものの意と解し、一俵物がその公事の対象であると説き、<sup>(五四)</sup>また竹内理三博士は論文「対馬の古文書」の中で、「於八海舟のうり口かい口」とあるのを採り上げて、他国との商売即ち高麗・陸地の一俵物とは別に、対馬島内に於ける沿岸交易の意であると説明されているのは、<sup>(五六)</sup>いずれも『問答寛書』の前段(1)の説明に引きずられた誤解である。「八海に於ける船の売口買口」は島内全域に亘った在籍船の渡航権の売買と解釈しなくてはならない。

しかし船の渡航権の売買だけでなく、造船に対しても課税されたことと共に、船自体の売買もまた課税対象となったことは、次の判物によって知られる。

船売買并為船作之公事、訴申之条、所有赦免也、依之相当之奉公、不可有油断之状如件、

永禄十三年

二月廿四日

義調(花押)  
早田三郎左衛門殿<sup>(五七)</sup>

御判不知

<sup>(多年)</sup>たねんそれへやとを候間申候、

一、船のうりくちかいくち

一、人のうりかいくち

一、山て おなしく

一、船のつくりてくうし

さしおき候、<sup>(自然)</sup>しせんとかく申候方候は、  
此おりかみいたし候て、申すへく候、諸事おりかみの事、かさね／＼いたすへく候状くたんのことし、

年号不知

<sup>(意見)</sup>あしみ

<sup>(馬)</sup>むまの五三郎所<sup>(五八)</sup>

なお(3)に六十人中に賜った格別の恩賞と云うのは若干伝説的な表現で、朝鮮貿易の参稼は勿論、一般の廻船商業については、少なくとも近世以前は六十人中に限定された権利ではなかったことは別の機会に説明することとする。

#### (六) 人の売口買口

云うまでもなく人身売買に関する課税である。『藤氏問答寛書』に、当国へ罷渡候諸士、当国に於て田畠を請持ち候事、人毎に容易に仰付られ難く候間、妙意様御代以来下作職を下され候儀、とも有之、とある。下作職とは元来請地耕作の権利の謂であるが、この場合では耕作人としての下人の使用権を指している。

みねのこほりの内ちしのくろうしの事、かの地にあいおい候する御公事をいたし、下作職さうそくのうは、さはいあるへからさる状如件、

永享三

九月八日

貞盛(花押)  
梅野三郎殿<sup>(五九)</sup>

十一月十三日

うゑのつかいよそう  
みやのさた人等中(六二)

下人の高麗公事とは、下人が高麗人であつた故であらう。また下人公事の最も古い現存文書の例であるが、

二郎あもんの下人二人(大狩用達)おうかりようとう、こちまを(当分)とふんに負う下人一人  
かおうかりようとうは、さしおかるべく候、  
(元忠)  
けんをう二

九月廿一日

六郎殿(盛国(花押) 六二)

これは八幡宮祭祀のための大狩用途として米穀の代りに下人を代納したもの、二人割当のところ一人は免除することを言渡した書下で、下人の売買ではなく、下人が貢納されたことを示すものである。この外に、下人を寺社に寄進した古文書は数多く見られる。

『人の売口買口』は「しもへのうり口かい口」とも書き、明かに下人が売買の対象となっているが、この外に「人のかき物のくうし」と呼んだ例があり、「鬻物」とも借字されている。近世に於ける土地担保の金融に質入・書入の二種類の行なわれたが、この場合の「書き物」である土地は、単に担保に充当するだけで、貸借の期間中、耕作権を貸主に附与して、その收穫を以て利子を支払うわけではない。「かき物」がこの「書き物」と語源的に関連があるかどうか遽かに断定できないが、卑見では「人のかき物」は譲与或は質入によつ

島内資源に恵まれない対馬に於いて、人は重要な資源であつた。中世の海寇が米と人を掠奪の目的とし、携えられた男女はその労働力を対象に商品化されたことは、今更贅言を要しないが、海寇静謐後でも貧賤人や流科人などは下人に没して売買・譲与・質入及び相続された。尤も下人は売買譲渡されたものの、その所有者との間には封建的主従関係といったものが存在し、ヨーロッパ諸国でいう人格が全く無視された奴隷とはやや性質が異っている。宗氏はこの売買に公事を課して認許したのである。下人の売買・譲与・質入乃至相続に関する訴訟は中世の古文書に屢見するが、『御成敗式目』第四十一条にも「奴婢雑人事」の一条があり、対馬に於いても『小森家文書』に介知大橡経能と豆酸郡住人覚範の子孫との相論に対する元徳二年八月二十八日付地頭代宗盛国宛守護人少貳武藤貞経の裁許状が現蔵されている。(六〇)近世になって、藩主から家臣に対し、成下されるといふ形で、科人・牢人・縁坐者乃至小者・被官などが下人として賜与される制度があり、『厳原藩人被下帳』がこれであるが、この種制度は加賀藩・徳島藩などにも見られる。対馬での特徴は下人に他国人が数多く含まれていることであらう。下人の成下しが妙意即ち宗盛国の代から始まったと説明しているが、下人売買公事の判物の初見は、

(花押) 〇宗経茂

(料木) 〇所  
くちきのたんところの下人の、かうらいくうし(別巻)の事、へちのきとして、さしおくところなり、そのむねをそんちすへき也、  
(存知)

貞治四



て取得した下人に対する使用権の認定であつて、その公事は買主に対して課せられたものと思う。すなわち売買質権の成立は認可を要し、これが公事の形をとっているものと考えられる。

とく房かき物くうし一貫はたしかに請候、仍てかたき所の状如件、

享禄三（六の）のへ  
とらへ

十一月二日

順 永（花押）  
（六五）  
宗新兵衛殿 進之

二郎かき物之公事之事、たしかにうけ候状如件、

享禄五年

八月三日

順 永（花押）  
（六六）  
山河彦五郎殿 進之候

下人三郎しやく（若）は（盛）いの時よりてつけおかれ候公事、うけとり申候、為後日状如件、

永禄五年（六の）へいぬ

九月廿四日

佐奈豊修理亮  
（六七）  
盛 国（花押）  
峰左衛門大輔殿 まいる

また「下人立よりの公事」（六八）或は「立入之公事」（六九）という表現があるが、人を対象とした入会権の意で、下人の共同使用権を指称したものである。  
人（七〇）のうり口かい口、并立よりのくうし、そなた者代子ともたち之内者人、合て式代免きよいたし候事定也、仍為後日之状如件、

天正七年（七一）つもの  
とう

十二月三日

佐奈豊安房守  
（七二）  
盛 国（花押）  
峯左衛門大夫殿 まいる

下人成下しの判物には、

略前

一、下人こん房か事、白水彦八郎致所望遣候、彼等か子々孫々末代の下人たる者也、於以後、聊違乱之ともからあるへからざる者也、

右此条々事、為扶持、万難諸公事等聞也、堅此之由可存知之状如件、

文明十五年

八月十一日

貞 国 御在判  
（七三）  
津江右京亮殿

し（符）ふ（来）らい下人あたへられ、ならひに下人そふ（相）そく（總）のこと、せんかたそふいあるへからざること、いまにからざることのしやう、くたんのことし、

寛正二

二月七日

茂 世（花押）  
（七四）  
斎藤藏介殿へ

などがあるが、いずれも、下人使用権を認定したものである。

於対馬国、人のうりく地かいくち、并船のうりく地かいくちの事、指置致扶持者也、仍此旨可存知之状如件、

寛正三

十一月十五日

成 職（花押）  
（七五）  
梅野三郎殿

これは下人売買公事免の判物の典型的な例であるが、売買の公事は、

井手之宿人(七六)  
まいる

書き物の場合と異り、次の例に見られる如く売買兩人双方で負担した  
ものと思われる。

うち山宗長門入道殿

うち山宗右衛門殿

くねの宗因幡守殿(久慈)

くねの宗彈正忠殿

くねの宗左衛門尉殿

くねの宗与次郎殿

くねの宗太郎左衛門尉殿

此七人之方々之下人の売口買口の公事之事、我人代之事者略申候、各々  
御子孫又は我々か子孫におゐては、其代々両方の儀によるへし、仍為後日  
証状如件、

文明十六年甲辰二月廿二日

宗中務少輔職永判

御寄合中(七四)

書き物の公事の場合は、

醍豆郡之人之闕物之公事の事、代々成敗にまかせて、堅さいそくせられへ  
く候、若異儀之族候は、(別)へつしてその可致沙汰候也、仍状如件、

文明三

十一月十五日

貞国 御判  
宗中務少輔殿(七五)

見付下部の闕物公事等之事、致扶持、令免許候処之状如件、

永正九

卯月十九日

盛 永判

前者は徴税の催促であり、後者は、公事免である。書き物の対象と  
なった下人は、中世に於ては海賊船が掠奪し来ったもの即ち島外他国  
のものや唐人即ち被擄朝鮮人男女が少くなかったようである。

今度筑前国よりつれわたされ候下人四郎三郎并おと女のかきものの公事  
事、所請取之状如件、

明応九

二月卅日

宗安房守  
とよむら 盛永(七七)  
洲河掃部助殿  
進之候

唐(唐)人女  
たうしんおんな一人ふんのかき物六百文、かいなううけとり、けんさへも  
んとのうちの御なのうけとり

おうゑい廿六ねん

十二月十九日

くにしけ判(七八)

被擄朝鮮人女性一人分の公事六〇〇文が譲受人源左衛門の手から徴収  
されたことがわかるが、果して使用権の代価については明かでない。

唐(唐)人のあん(安堵料)とれうの事、一貫五百文つゝさたあるへき也、

たうしんの人しゆ、かうらいわたり船のくうしあしの事、さた人のせいもん  
をもて、しるし申へきよし、さいそくあるへき状如件、

建徳元年

十一月一日

宗慶 御判  
まこ二郎入道殿(七九)

唐人の安堵料とあるが、書き物の公事であって、人別一貫五〇〇文を徴収したものである。下人の使用権を認証するところから安堵と呼んだものと思われる。下人書き物の公事としては最も古い判物である。

船頭さへもん四郎下人二人の内、一人の事はさし置候、一人の事は御公事たしかにうけ取候、

文安六年

十月五日  
〔端裏〕  
宗さへもん亮

国 繩 (花押)

下人かき物の限定公事免の例である。下人は一般に在方では耕作等の労働に従事し、町方では奴婢として雑務に使役されたが、寺社の造営、道川の普請・浚渫などの公役にも、公事銭の代償として随時徴発されたようである。

〔下津〕  
〔櫓〕  
〔樓門〕  
〔造営〕  
〔切手〕  
しもつ八まんくうのろうもんさうゑのきつての事、こしのしはやぐに、  
〔人走〕  
にんふ走人つゝ代くわんの方へおほせられ、かたくさいそく候て、きつて  
にめしつかわれへく候、尚々しんれよの事にて、かたくさいそく候へく  
候、恐々謹言、

三月十日

貞 茂 (花押)  
大せうけち三郎兵衛殿へ

また船頭の下人とあるが、これは水主・網人などに雇傭されたものと思われる。水主・網人は必ずしも下人であるかどうかかわらないが、判物によれば課税の対象になっている。

なお売口買口の口は、口銭の意であって、公事を指称していることはいふまでもない。

又御評難事以下非法事、向後停止之由、同被申候、以上、  
対馬嶋御分等申候口銭事、任故大殿御時公文所書下、可被免除也、可被存知其旨之由候、恐々謹言、

建武四

七月二日

頼 宣 (花押)  
宗右馬入道殿

これは守護が御分と称して課した口銭であるが、その内容については知る由もない。しかし対馬着岸の商船に前分の名儀で積荷の点定とその抽解が行なわれていたことは前述した。恐らくこれら経済行為に対する課税であろう。

## (七) 塩 判

高麗一俵物と同義語と解釈される。塩が朝鮮に積出されたことは、応永三十五年二月に朝鮮に渡航した宗貞盛の使送宗太郎なる者が礼曹に供呈した言葉に、

本島地皆巖石、未嘗業農、惟以葛根橡実為食、生理甚艱、欲以魚塩買穀、  
来泊乃而浦、

とあり、また永享十一年十月に礼曹が宗貞盛に致した書契によると、  
定約によつて使送船に対しては口料を支給するが、私の貿易船即ち魚塩雑物と売船については口料を給与しないことを再確認していることから理解される。『宗家判物写』に収められた書下を通観すると、高麗一俵物とあって然るべきところに「高麗塩判之事」とあり、「塩御判の公事物」が愁訴によつて六地一俵物とともに扶持を加えられた



卯月十九日

貞盛(花押)  
宗美濃介殿

浦のはまのわたくしかまの事、代々の御判のむねにまかせ、諸公事りんしくわやくの事、御めんある所也、其旨存知あるへき状如件、

長祿二年

二月廿日

成職 御判  
宗豊前守殿

以上は公事免乃至限定公事免の判物であるが、次の判物によると、塩竈の課役は塩一〇俵であり、また、塩竈公事免の代償として課せられたものを山手と呼んでいる。

(古藤源左衛門) ことうけんさへもんかまの事は、せんれいのまましを十俵をはほんそう申されへく候、これをはまんそうしよくうし御めんある所也、其旨存知へき之状如件

長享元

六月三日

貞国(花押)  
(九六)

豊崎郡之内福まか浦のかまの事、可准郡主之竈之由、被望之条、かなへ所の公役之事、有免許所也、然者山手として毎年塩十俵堅固可有奔走者也、仍為後日之状如件、

天文廿三

八月廿二日

義調(花押)  
糸瀬播磨守殿

私竈の新立奨励については、

しはやの事、わたくしにおいて、したつるへきよし申され候、しかるへく候、いそぎくしたてられへく、もしたほかないよりとかく申されも、こなたへ申さるへく候、其時しかるへきやうにりうけんいたすへく候、恐々謹言、

十月一日

貞盛(花押)  
扇左京亮殿

とあり、また次の文書は塩竈についての最も古いものであるが、これによると対馬の塩業に本土の金融資本が投入されていたことが想像される。

対馬嶋のしはやの事、注文をあいそへて、かしあけのかたにわたさるほか、今年はしめてたつところのしほかまをは、けんさいにまかせて、く(宮内)入道のさたとして、ねんく(年貢)をさたししんすへきよし、先日おほせられをはぬ、そんふんをくない入道にくわしくおほせをふくめらるへく候、かしく元応元

十一月廿九日

貞経(花押)  
西郷入道殿  
八田六郎殿

しかも徴税者である竈主の一族が塩業者に対して屢々押妨を行なつたことは、

対馬嶋塩屋百姓源藤六・源八男等申船木事、大山小次郎左衛門尉或運取之、或被違乱云々、太無謂、早且礼返件木於本主、且可被止向後違乱之状如件、

康永四

二月一日

将意(花押)

顯景(花押)  
大山宮内允殿

船木とあるのは造船材料であろう。塩業者がその生産品を積出すために船材の伐採を行なったと見られ、山手・木手が彼等に賦課される所以でもある。

(ハ) おうせん判

「おうせん判」(一〇二)「大船判」(一〇三)とも書き、「おうせんつりふねのくうし」(一〇四)「おうせん船の釣公事」(一〇五)などと記されている。「おうせん」の語義についてはわからないが、大船は当て字であろう。長節子氏は論文「おうせん論考」で韓語어부(漁夫)선(船)の転化であろうという見解を述べているが、朝鮮の『統大典』戸典魚塩に各邑所在の漁夫船の収税に関する規定を記して居り、当時朝鮮に於いて漁夫船という成語があったことは疑いない。恐らく三浦居住の対馬島人がこの韓音を聞き慣れて、出漁の意味に「大せん(大船)にゆく」という表現を用い、これが島内に伝播して熟語となったのではあるまいか。ともかくも「おうせん判」は朝鮮近海出漁に対する課税である。『対馬古文書纂』には対馬の史家内野運(對琴)の補註があるが、これによると、おうせん判物に註して、

中世浅海ノ漁戸ニ釣船公事ト云土納物アリ、魚ヲ捕、運上ノ事ナリ、オウセン舟ト云事、未詳其義、然レ九州ノ漁戸或ハ隣国ノ漁舟来テ漁スル舟ノ唱也、此御判漁舟ノ貢物ヲ扶助ニ賜書タリ、旧法止テ諸家知行セス、此類

旧家ノ諸氏ニ御判伝レリ、

とあるが、『斎藤家文書』宝徳四年三月二十一日付斎藤下野守宛宗貞盛書下によると、黒瀬・竹浦のおうせん船の釣公事が同家に宛行われている。さらに次の判物を見ても、扶持乃至公事免の判物はいずれもその支配水域が限定され、必ずしも浅茅湾内の漁戸を限ったわけではない。

対馬船越々下に著候する沓岐船のおうせんのつりのくうし等、為給分所宛行也、任先例、可被沙汰之状如件、

文安二

十二月十五日

貞盛 御判  
宗伊豆守殿

おうせんつりふねのくうしは、一艘に沓貫三百にて候へく候、そのふん心へられ候て、さた可有候、恐々謹言、

六月廿五日

貞盛 御判  
宗いつの守殿

つしまの国さすのこほりあれのはまより、大せん(大船)にゆき候くうし、とたう(渡唐)きてう、同廿こんうは共に進候、よてこのむねそんちあるへき状如件、

康正三年九月三日

成職 御判  
宗孫二郎殿

これによれば、支配水域に着船する他国船からも徴税して居り、その公事は一艘につき漁獲量に拘らず一貫三〇〇文であるが、阿連の漁船の場合には往還合わせて四十噸の魚が徴された如くである。噸とは近

世の肩銀の意で、可担の限度一杯に当る容量単位であるから、税内容は魚の現物であった。魚の種類や一嚙が何尾に相当するかは全く不明であるが、

ほうこう申候間、大魚一ついか十まいふちいたし候、一筆如件、

元龜三年

正月十九日

調国(花押)  
内野五郎左衛門殿

ほうこう申候間、いやしき一つ遣之候、一筆如件

元龜四年

七月八日

調国(花押)  
市山源六兵衛殿

とあるように、伊奈に於いて恩賞として大魚一尾と烏賊一〇枚が居屋敷一所と同様に扶持されているところから見て、四〇匁は相当の負担であったに相違ない。

支配水域はそこに発着する漁船に対してだけでなく、漁場に及んでいたことは『津原家文書』に、

今津漁場等事、任文書、相統之旨、不可有相違之状如件、

応永卅三

三月廿九日

貞盛(花押)  
津原右衛門尉殿

とあるのでもわかるが、「おうせん」が、朝鮮近海への出漁について云っていることは、次の判物でも理解される。

かうらいおうせんつり舟の御公事、任先御判之旨候、  
略中 仍此旨可存知之

状如件、

応仁三

五月廿五日

貞国(花押)  
長野左衛門九郎殿

一、(尾崎假宿) おさきかりやとの舟、高麗江渡海之時、塩判、同いかりの公事の事、并

大せん判之事、

略中

右此前、如先々為給所宛行之者也、仍此旨可被存知之状如件、

大永二年

五月五日

盛長(御判)  
宗右衛門大夫殿

朝鮮近海に於ける漁船の出漁について些か言及すると、はじめ南朝鮮の近海で自由に操業していたわが漁船は、貿易船に対する浦所限定の措置とともに、三浦即ち蔚山塩浦・熊川乃而浦及び東萊富山浦の隣接海面だけに制限された。ところがこれら指定の浦所が巨済島以東の慶尚道沿岸に位していたために、同島の西方全羅道寄りの水産資源豊かな多島海水域に漁場設定の交渉を進め、嘉吉元年に孤草島釣魚禁約が成立して、その目的は一応達成された。孤草島は現在の韓国慶尚南道統営郡三山面の水域に点在する島嶼で、『経国大典』二 戸曹雜税に「孤島・草島釣魚倭船」とあり、また『朝鮮世宗実録』によると、世宗五年十月庚戌条全羅道処置使尹得洪馳啓では、孤島に泊した賊船を斬獲したとあり、同二十四年八月甲寅条兵曹啓にも、孤草両島釣魚定約

とはっきり言っているから、二つの島と考えられるが、もとより厳しい漁場規制があったわけではないから、南海島水域まで含んでいたものと思われる。この定約に依って漁船はすべて朝鮮政府が対馬島主と認知した宗氏から出漁証明の文引を受けて巨済島知世浦に赴き、同地の水軍万戸から更めて孤草島漁場出入の文引を与えられ、万戸管下の射官がその船に同騎して、帰還に際しては再び知世浦に立寄り、文引を返還して税魚を収め、島主文引に証明をもらって帰国する手続であった。<sup>(二八)</sup>その税額は、朝鮮政府ははじめ大船五〇〇尾・中船四〇〇尾・小船三〇〇尾と決めたが、その後宗氏の要請によって再度改定して、大船二〇〇尾・中船一五〇尾・小船一〇〇尾の収税を行なった如くである。<sup>(二九)</sup>

対馬に於ける課税は前述の如くで、朝鮮側とは関係なく行なわれたが、阿連の漁民が渡唐帰朝同じく魚を徴せられたというのは、出港と帰港の二回に亘って課税されたことになり、出港に際してまだ漁獲のないのに魚を徴するという非常識なことはあり得ないから、帰港時にその倍額を課せられたと見る外ない。それにしても原因課税の建前である税法に、同一税目で二度乃至二重に徴収するのはおかしい。そこで長節子氏は前掲論文で、公事に二種類あって、出魚のための文引給付の公事と別に漁業活動そのものに対する公事があるとし、「おうせん判」とは釣魚条約に規定された島主文引であると説明している。<sup>(三〇)</sup>前者を出港時、後者を帰港時に徴したと見たわけである。使送船と違って、書契の携行を必要としない出漁船の文引給付に手数料を徴したか

どうかは疑問で、これを肯定してもおうせん判の判を証判と考え、文引発給手続を証認するもの乃至は文引そのものを指すとするのは誤解である。判とは「塩判」と同じく公事を意味する。<sup>(三二)</sup>

「おうせん判」に関する判物は、応永三十年を初見とし、文禄五年<sup>(三三)</sup>まであるが、扶持乃至公事免は文明年間が最も多く、それ以降は既得権の安堵のみで、判物受給者も西泊の犬塚、志多賀の長野など限られた数氏に過ぎない。このことは出漁船を持つ支配水域に関連があり、また文明年間に受給者の多いことは、宗貞国の対馬一円支配が確立しつつあったことを意味する。「おうせん」を孤草島釣魚禁約の締結によって発生したという見解は誤りで、応永年間の判物が存在することでもわかるが、永正七年三浦の乱を契機として対馬島人の浦所恒居がなくなり、釣魚文引の給付が行なわれなくなった結果、漁場規制の廃止とともに、出漁は密漁の形となったから、安堵の判物は漸次無意味となり、慶長己酉約条の締結によって「おうせん」即ち朝鮮近海への出漁は全く停廃されたのである。

註(一)(二)(二七) 『宗家判物写』貞享書上三根郡佐賀村梯源右衛門所持永正十八年八月十七日付篠田平左衛門尉宛宗盛長書下

(二)(一〇) 同書享保書上与良郷小船越村小島三郎右衛門持来分寛正六年九月十日付小島寄合中宛宗成職書下。同書享保書上三根郷賀佐村足輕多田善左衛門所持大永五年六月十二日付多田八郎左衛門宛間長修理亮秋久遵行状・狩尾村百姓治右衛門所持応永廿三年二月廿五日付兵衛門三郎宛宗貞茂書下

(三三) 同書貞享書上馬廻俵虎之助所持。同書享保書上豊崎郷舟志村武本九



左衛門所持永禄五年二月十三日付宗晴康書下に「豊崎郡東おに五浦山手之公事」とあり、課税地域がはっきりするが、同書貞享書上馬廻吉賀兵右衛門所持応永廿一年十二月廿九日付中原修理亮宛宗貞茂書下にも「久田香椎山手」とあり、香椎が一見地名のように見える。しかし同書貞享書上佐須郡久根浜村百姓四郎兵衛所持文明六年二月十一日付たくみ孫二郎宛宗出羽守貞秀書下に「かしのやまて」とあり、更に同書享保書上与良郷竹敷浦村甚左衛門持来分応永十一年十月八日付宗貞茂書下では「かしの山手」とあるから、課税物件は檜の木材であると判断される。また同書享保書上伊奈郷伊奈村庄司三郎五郎分文安三年霜月十五日付庄司左衛門五郎宛某書下では、きて山ての公事が六地の渡海について扶持されて居り、同書同上「一重村足輕平間藤右衛門頂戴分には

(花押) 宗調昌

山ての事、永代ふち申候、大船小船しよふたるへく候、仍為後日一筆遣し候、

永禄十年卯丁

十二月十一日

西山藤右衛門尉殿

とあって、船舶に山手が賦課されたことがよくわかる。

(四) 桑手については『宗家判物写』延宝書上町中野瀬忠左衛門所持文正元年八月十日付野瀬某宛宗成職書下に「おう(大浦)よりわに(鰐)の浦までのくわての事」とあり、給分が地域的課税即ち公事免の形で加扶持されている。

(五) 東京大学史料編纂所採訪古文書影写本による。原本は散逸して長崎県下県郡美津島町黒瀬の平山家には現在しない。『宗家判物写』享保書上与良郷黒瀬村平山五兵衛持来分

(六) 『宗家判物写』貞享書上「大扈從御判物帳」赤木小左衛門所持文明十五年三月八日付赤木次郎左衛門尉宛宗貞貞國書下

(七) 同書享保書上三根郷三根村給人御手洗甚左衛門所持文明七年十月七日付御手洗又三郎宛宗貞貞國書下

(八) 同書貞享書上「御旧判控」与良郡尾崎村早田仁左衛門所持長享二年三月六日付早田治部左衛門尉宛宗貞貞國書下。

(九) 同書享保書上三根郷志多賀村東月寺所持長禄二年九月廿二日付東月寺宛宗成職書下

(一〇) 同書貞享書上「御旧判控」三根郷志多賀村早田長八郎所持大永五年五月廿七日付早田五郎左衛門宛宗盛長書下

(一一) 『檜根一宮家文書』長崎県下県郡巖原町宮谷一宮峯夫氏所藏

(一二) 『宗家判物写』延宝書上町中野瀬忠左衛門所持文正元年八月十日付野瀬某宛宗成職書下

(一三) (一八) 同書町中津江藤右衛門所持応永三年十一月三十日付津江兵衛四郎宛惟宗貞盛書下

(一四) (三五) 同書貞享書上「大扈從御判物帳」小田弥二右衛門所持大永二年五月五日付宗右衛門大夫宛宗盛長宛行状

(一五) (三七) 同書貞享書上「御旧判写」伊奈郡琴村財部弥次右衛門所持永享三年九月十日付財部掃部助宛宗貞盛書下

(一六) 同書享保書上与良郷小船越村日下部茂左衛門所持応仁元年九月廿九日付草鹿部平次郎宛宗貞貞國書下

(一七) 同書貞享書上「御旧判控」三根郡佐賀村塩津留津右衛門所持文明六年八月九日付塩津留主殿助宛宗貞貞國書下

(一八) 同書貞享書上「御旧判控」与良郡尾崎村早田仁右衛門所持長享二年三月六日付早田治部左衛門尉宛宗貞貞國書下

(二二) 『六十人中平山家文書』長崎県上県郡上対馬町比田勝平山茂吉氏所蔵。このほかに『宗家判物写』享保書上三根郷佐賀村百姓長兵衛所持分に、

当津船公事以下、依被申子細候、令免許候畢、於以後、聊不可相違之儀候、仍如件、

永正七年

庚午五月吉日

興朝(花押)

篠崎平左衛門尉殿

また同書享保書上与良郷竹敷浦村弥兵衛持来分に

於当津奥浜入船公事之事、役人前民部入道申合候、然は於以後は、公事錢不可有其沙汰候、海上之事は、以前被遣折搭候き、是又不可有相違儀也、恐惶謹言、

文明十一

十一月二十五日

野かみ備前守

景郷(花押)

対馬船頭

高尾五郎左衛門尉とのへ

(二三) (二四) (二五) (二六) 『大山小田家文書』長崎県下県郡巖原

町田淵庄司シナ氏所蔵。『宗家判物写』享保書上与良郷大山村大山喜左衛門所持

(二八) 森克己博士「中世末近世初頭における対馬宗氏の対鮮貿易」(九州大学九州文化史研究所紀要)一号「対馬の史的研究」所収

(二九) 『河内大浦家文書』長崎県上県郡上対馬町比田勝大浦博道氏所蔵。『宗家判物写』享保書上豊崎郷河内村大浦貞之進所持九月十三日付

豊崎郡老中宛宗義調書状

(三〇) 『宗家判物写』延宝書上町中津江藤右衛門所持文明十五年八月十一日付津江右京亮宛宗貞国書下

(三一) 同書貞享書上三根郷佐賀村塩津留津右衛門所持文明六年八月九日付塩津留主殿助宛宗貞国書下

(三二) 同書延宝書上町六十人中梯七郎右衛門所持嘉吉三年五月四日付梯源左衛門尉宛宗貞盛書下

(三三) 同書貞享書上伊奈郡女連村部原忠左衛門所持永享十一年二月廿四日付部原彦八宛宗貞盛書下

(三四) 沼田次郎氏「日清貿易に於ける一問題——俵物の輸出について」(『歴史地理』第六八巻第五・六号)

(三六) 『宗家判物写』貞享書上「馬廻御判物帳」幾度六右衛門妻所持(三八) 註(一九) 同一文書が同書与良郷尾崎村日下部惣左衛門所持として二通収録され、さらに関連文書大永五年五月十九日付草鹿部修理亮宛

宗盛長宛行状・延徳三年十一月十九日付草鹿部平次郎宛宗貞秀遵行状がある。

(三九) (四〇) 『宗家判物写』延宝書上町六十人中梯七郎右衛門所持

(四一) 同書享保書上豊崎郷河内村大浦貞之進所持

(四二) 同書享保書上三根郷志多賀村東月寺所持

(四三) 同書貞享再訂書上「大小姓御判物控」鈴木權平所持

(四四) 同書享保書上豊崎郷西泊村百姓善六所持永享某年六月十八日付安

心院三郎左衛門宛宗貞盛書下

(四五) 同書享保書上三根郷青海村平山利兵衛所持天正七年十二月十六日付平山左近助宛宗義純書下

(四六) (六九) 同書貞享書上「集御判物帳」御持留赤木茂左衛門所持文明八年卯月廿八日付彦三郎宛宗貞国書下

(四七) 『嚴原藩御壁書控』九州大学附属図書館所蔵。原本は長崎県下県郡嚴原町国分宗家文庫に襲蔵されている。

(四八) (四九) 『宗家判物写』貞享書上「馬廻御判物帳」久和弥五左衛門所持

(五〇) 同書貞享書上佐須郡内久根村宇野瀬助市分

(五一) (五二) 同書貞享書上「馬廻御判物帳」俵虎之助所持

(五三) 『宗家判物写』享保書上仁位郷曾村足輕多四郎所持。これに次ぐものは『宗家判物写』延宝書上町中津江藤左衛門所持応永三年十一月三十日付津江兵衛四郎宛宛宗貞盛書下になる。

(五四) 宮本又次氏「対馬藩の商業と生産方」(『九州大学九州文化史研究所紀要』第一「対馬の史的研究」所収) 一四頁

(五五) 『長野家文書』長崎県上県郡峯村志多賀長野実氏所蔵、応仁三年五月廿五日付長野新右衛門尉宛宛宗貞国書下。『宗家判物写』享保書上三根郷志多賀村足輕長野善八所持

(五六) 竹内理三博士「対馬の古文書」(『九州大学九州文化史研究所紀要』第一「対馬の史的研究」所収) 一一六頁

(五七) 『宗家判物写』享保書上三根郷三根村百姓三郎兵衛所持

(五八) 同書延宝書上伊奈郡葦見村原田与市分

(五九) 同書貞享書上「馬廻御判物帳」梅野久右衛門所持。東京大学史料編纂所影写本『梅野喜一郎氏所蔵文書』

(六〇) 『小森家文書』長崎県下県郡嚴原町豆酲小森左京氏所蔵。全文は次の通り

対馬島介知大椽経能と同島豆々郡住人覚範子孫相論事、  
右訴訟之趣、子細雖多、所詮経能則覚範者、祖父西願下人也、四十余年服仕之後、西願讓与嫡子形部右馬允資時畢、資時又讓後家、而後家

依背西願之命讓与経能之間、経能進退服仕畢、然間去正和四年比、可請身之旨、雖令懇望、不叙用者也、召給其身、可服仕之由訴之、覚範亦於母堂者、雖為経能伯父資時下人、至親父者当島在庁三郎椽家則也、仍覚範得家則讓之時、適為経能伯父資時執筆書与讓状等覚畢、仍覚範令勤仕流人雜事以下在庁役、雖及八十有余、雖一日片時、所役服仕之上者、可請身之旨令申、由事無跡形、大不実之由陳之者、経能得西願之由、雖称申、無服仕支証、及訴陳、覚範死去事、況子息太郎椽成家・伊予房覚増・四郎椽家光・伊勢房五郎等兄弟五人輩、敢無服仕所凡歟、然者任関東御事書之旨、早記違期之上者、所被棄捐経能訴訟也、可令存其旨之状如件、

元徳二年八月廿八日

妙恵(花押)

宗馬弥次郎入道殿

(六一) 『宗家判物写』享保書上与良郷鶏知村大椽阿比留七左衛門所持  
(六二) 『斎藤家文書』長崎県下県郡嚴原町今屋敷斎藤定樹氏所蔵

(六三) 『宗家判物写』享保書上豊崎郷五根緒村糸瀬幾左衛門所持文安六年七月十日付伊土瀬掃部助宛宛宗貞盛書下・文明八年八月二日付伊土瀬若狭守宛宗貞国書下。同書享保書上与良郷鶏知村阿比留市十郎所持応仁二年二月十四日付阿比留新右衛門尉宛宛宗貞国書下

(六四) 「人のかき物おなしく人のうりくちかいくちの事」と両者を區別した判物がある。『六十人中平山家文書』文安六年四月十四日付平山助三郎宛宗貞盛書下。『宗家判物写』貞享書上「町人御判物帳」平山新四郎所持。売買と書き物とは違うことがわかる。

また『宗家判物写』享保書上豊崎郷舟志村古藤作左衛門所持文安五年十一月廿日付古藤源左衛門尉宛宛宗貞盛書下には「六ち高麗船のかき物」を船の諸口と區別して記している。船にも書き物があることが知られる。

- (六五) 『宗家判物写』享保書上三根郷吉田村給人中村六郎左衛門分  
(六六) 同書享保書上三根郷志多賀村百姓又右衛門分  
(六七) (七〇) 同書享保書上三根郷吉田村百姓源左衛門所持  
(六八) 註(一九)『宗家判物写』享保書上三根郷三根村百姓善六所持天文十三年七月十八日付阿比留左近允宛宗修理亮盛國請取狀  
(七一) 『宗家判物写』延宝書上町中津江藤右衛門所持  
(七二) 同書享保書上与良郷内院村齋藤清右衛門持来分  
(七三) 同書貞享書上馬廻梅野久右衛門所持  
(七四) 『内山家文書』九州大学九州文化史研究所影写本  
(七五) 『宗家判物写』貞享書上馬廻幾度六右衛門妻所持  
(七六) 同書貞享書上三根郷小峯村三浦内蔵允被官長留久兵衛所持  
(七七) 『洲河家文書』長崎県上県郡上対馬町豊洲河生虎真氏所持。『宗家判物写』享保書上豊崎郷豊村須川万右衛門所持  
(七八) 『斎藤家文書』長崎県下県郡敵原町今屋敷齋藤定樹氏所持。『宗家判物写』貞享書上佐須郡久根村齋藤弥兵衛所持  
(七九) 『宗家判物写』貞享書上三根郷青海村平山三郎左衛門所持  
(八〇) 『津江家文書』長崎県上県郡峯村志多賀津江素直氏所持。『宗家判物写』享保書上三根郷志多賀村足輕津江勘右衛門所持  
(八一) 『宗家判物写』享保書上与良郷鶏知村大椽阿比留七左衛門持来分  
(八二) 『大山小田家文書』長崎県下県郡敵原町田淵庄司シナ氏所持。『宗家判物写』享保書上与良郷大山村大山喜左衛門所持貞治五年十月十一日付大山宮内さえもん尉宛宗宗慶網人注文  
(八三) 『宗家判物写』享保書上三根郷三根村百姓三郎兵衛所持  
(八四) 『朝鮮世宗実録』卷三九世宗十年二月己巳  
(八五) 同書卷八七世宗二十一年十月丙申  
(八六) 『宗家判物写』享保書上三根郷佐賀村足輕篠栗久兵衛所持永正十八年三月十五日付篠栗修理亮宛宗盛長書下  
(八七) 『大山小田家文書』(前掲)。『宗家判物写』享保書上与良郷大山村大山喜左衛門所持  
(八八) 『島居家文書』長崎県上県郡峯村木坂島居伝氏所持  
(八九) 『宗家判物写』貞享書上馬廻幾度六右衛門妻所持。一般に竈とは塩竈のことで、近世の百姓竈と混同してはならない。寛文十一年に百姓に均分に給した土地、本戸一尺当りの配当地を一竈と呼んでいる。  
(九〇) (九四) 同書享保書上仁位郷嵯峨村給人佐伯六郎右衛門所持  
(九一) 『川本家文書』長崎県上県郡上県町樫瀧川本源盛氏所持。『宗家判物写』延宝書上伊奈郡下樫瀧村給人川本与左衛門分  
(九二) (九五) 『宗家判物写』貞享書上馬廻吉賀兵右衛門所持  
(九三) 東京大学史料編纂所影写本『田口宗喜氏所蔵文書』・『宗家判物写』享保書上三根郷三根村給人田口善左衛門所持  
(九六) 『宗家判物写』享保書上豊崎郷舟志村古藤作右衛門所持  
(九七) 同書享保書上豊崎郷五根緒村糸瀬茂兵衛所持  
(九八) 同書享保書上伊奈郷一重村百姓源兵衛頂載  
(九九) 『大山小田家文書』(前掲)。『宗家判物写』享保書上与良郷大山村大山喜左衛門所持  
(一〇〇) 同右。『長崎県史』史料編第一の六一八頁は誤謬が多い。  
(一〇一) 『大山小田家文書』(前掲)。『宗家判物写』享保書上与良郷大山村大山喜左衛門所持享徳三年二月五日付大山宮内左衛門宛宗成職書下  
(一〇二) 同書貞享書上豊崎郡西泊村神主兵左衛門所持文正文元年八月廿二日付大塚六郎次郎宛宗盛直遵行状  
(一〇三)、(一〇九) 同書貞享再訂書上佐須郡樫根村給人長瀬仁左衛門所

持六月廿五日付宗いつの守宛宗貞盛書下

(一〇四) (一〇七) 『斎藤家文書』宝徳四年三月廿一日付斎藤下野守宛

宗貞盛書下

(一〇五) 長節子氏「おふせん論考」『朝鮮学報』第三六輯一四四頁

(一〇六) (一一〇) 『宗家判物写』貞享書上歩行木寺源右衛門所持

(一〇八) 『宗家判物写』貞享再訂書上佐須郡檉根村給人長瀬仁左衛門所持

持

(一一一) 同書享保書上伊奈郡小鹿村百姓内野八郎左衛門頂戴

(一一二) 『市山家文書』長崎県上県郡上県町女連市山定男氏所蔵。『宗

家判物写』享保書上伊奈郷女連村百姓喜三右衛門頂戴

(一一三) 『津原家文書』長崎県下県郡美津島町賀谷津原和義氏所蔵

(一一四) 『宗家判物写』享保書上三根郷志多賀村足輕長野善八所持

(一一五) 『宗家判物写』貞享書上大鷹從小田弥二右衛門所持

(一一六) 『朝鮮世宗實録』卷二十世宗五年十月庚戌

(一一七) 同書卷九七世宗二十四年八月甲寅

(一一八) 同書卷一〇九世宗二十七年七月戊子。『海東諸国紀』朝聘応接紀

(釣魚禁約)

(一二九) 同書卷九六世宗二十四年六月丙午。『経国大典』卷二戸曹雜稅

(一三〇) 長節子氏前掲論文一四四～五頁

(一二一) 『宗家判物写』延宝書上町中津江藤右衛門所持応永三年十一月

三十日付津江兵衛四郎宛宗盛書下。この判物の年次は誤写で、応永三十

年と推定する。

(一二二) 同書享保書上豊崎郷西泊村百姓兵左衛門所持文禄五年八月十四

日付犬塚二兵衛宛宗智就書下

### 第三節 貿易手続に伴なり所務知行

所謂船の公事と汎称される種々な海上活動に対する課税について卑見を述べ、且つこれが対馬に於ける土地を離脱した特権的知行である所以を説明して来たが、特権知行の最大の焦点は、何と云っても朝鮮政府の貿易規制によって生れた島主文引の発給手続に対する手数料と定約による島主歳遣船及び受職・受図書人の持つ貿易船渡航に関する所務即ち貿易権の給付であることは論を俟たない。しかもこれらの権利は全くの加扶助であつたが、蓋し相手国政府の出方によってはいつ喪失するかわからない不安定な受権であつたからである。以下これについて述べよう。

#### (九) 吹拳錢

朝鮮に渡航する貿易船に対して、朝鮮政府が対馬島主と認知する宗氏(一)が下附する渡航証明書即ち文引を発給することを吹拳と云い、近世では吹嘘とも書き、「スイコ」と読んだ。この読み方から転化して水書とも呼んだらしいが、渡航証明の意味を單的に表現して至妙である。以酹菴住僧規伯玄方の『対馬送使私記』に

一、吹拳トハ、国王殿并三管領其外諸国ヨリ渡ル船ニ、島主其由ヲ書テ、証抛トナス添書也、此吹拳無之ヲ、海賊船ト可知ト約束スル也、

とあるが、渡航船が宗氏一本に集約された近世の吹嘘と、形式的には国王使即ち室町將軍家の使送船を初め、大は諸国守護大名から小は土

豪的国人層に至る所謂諸魯名儀の貿易船に対して行なつた吹拳とでは、単にニュアンスだけでなく、文引の書式・内容に於いても可成りの相違があつたことに留意しなくてはならない。

吹拳銭とは、その文引発給の手数料の謂で、やはり一種の運上であつた。『藤氏問答覚書』によれば、「吹拳銭之条」に

吹拳銭と申は、朝鮮渡海之諸船に吹嘘を被出候儀、兼て朝鮮と御条約之事候、其故は日本兵乱之砌、西海道に致流浪候浮民、只管唐土・朝鮮之地に罷渡、貨財を致盜賊来、唐土も年に余り害之甚敷、譬には南倭北虜と申候程にて、朝鮮は、海辺之民家、生業不相成程に有之候間、御先祖様へ御頼申、色々御世話を受候得共、海賊難止候付、御家之切手無之は、賊船の格に取行申法度講定候、朝鮮か史書に、無宗氏之文引則不接待と有之、文引は則右之吹嘘に御座候、都て朝鮮渡之船に吹嘘を被出、此運上之内、所務被仰付事有之候、前条致書載候一俵物と申は別段に御座候、

とある。判物に「吹拳屯通、扶持申す所」とあるのは、その渡航貿易船に文引を発給すること即ち朝鮮貿易に於ける貿易権行使を認可すると同時に、その文引手数料を扶持として与えることであつて、次の判物によれば、それが一層よく理解される。

高麗国江遣候書并吹拳認候役之事、為給所申付候所也、仍可存此旨之状如件

文明拾参

六月十二日

貞 国 御判

古川治部少輔殿

「吹拳認候役」とは文引発給のための手数料のことであり、「高麗国江遣候書」と云うのは、朝鮮へ渡航する使送船が携持する書契の意

から転じて、これに署押する図書即ち印章を意味し、更に渡航即ち貿易権の行使を認証する行為を指称したもの、書という字にこだわつてはならない。従つて、貿易権認証の判物という意味ではない。後述の「国並の書」というのも同様で、島主歳遣船が携持する書契は首船の一通だけで、他は文引のみを携えて行くのであるから、これも歳遣船の所務権の謂である。吹拳銭の宛行にも扶持と公事免とがあつた。

去年上使下向之時、鷹御所望之条、居登候憶進上申、為其功賞、其身并庄司又次郎官職之吹拳銭式艘分之事、末代所有扶持也、不可有相違之状如件、

永禄七年

八月十三日

義 調 御判  
内野善四郎殿

五嶋源純定送使之事、以内之調法、今年於朝鮮被渡候、就夫吹拳銭之儀、去年義純赦免之由候哉、当時被露之条、昭景一行遣候、然者於子々孫々不可相違之通、一筆所望之条、乍斟酌如斯候、此旨可被存知之状如件、

天正八庚辰

六月廿二日

(義 調)  
(六) 鷗 御判  
大浦主計允殿

前者の判物によると、内野善四郎は本人が所持する受職人名儀○食知中政府 事平信長か の外に、庄司又次郎が所持してその貿易権を行使していた受職人筑前州博多冷泉津居住司猛虎松名儀の吹拳銭をも扶持されたわけである。後者は「源純」○肥前州 五島々主 図書による定約送使で、『朝鮮送使国次之書契覚』によれば、天正九年三月二十二日に文引が発給されて

いるが、吹拳銭は同七年に宗義純が免除を認めたようである。

ところで吹拳には申次という手続があり、「申統」とも書かれているが、この手続を行なうものを申次人、その行為を「披露」と呼んでいる。貿易権の行使はそのまま行使者の所務となり、その負担すべき吹拳銭は扶持乃至赦免の場合であっても、申次は吹拳銭とは別個に文引発給手続の謝礼的な意味で、その所務の一部から徴収する慣例があったらしく、その取得分は披露した申次人の手に帰したのである。源純図書による大浦主計允の所務も、天正十年次の送使では四月二十七日付で津江監物助が申次を行なっている。

(A)就新印愁訴之儀、為使物白銀四貫文馳走、尤神妙候、就今度相叶源光銅印沓ケ、未代遣之候也、仍吹拳銭之儀、毎年無懈怠可遣納候、同吹拳申次之事、以立石駿河守可申候、此旨可存之状如件、

永禄十一年

三月四日

義調 御判  
小田三郎左衛門尉殿

(B)朝鮮において新印しうそにつゐて、使物として、先年白銀貳くわんめ木綿五そくほんそう候、就其五嶋鳴主源繁銅印沓ケ遣之候、吹拳銭之儀は毎年ちそうあるへく候、同申次之儀は小嶋宇渡助をもって披露あるへく候、仍状如件、

永禄十二

卯月廿日

義調 御判  
(宗調圖)(八)  
新方まいる

(C) 上松浦波多嶋源あん印之事、同名狩野介より毎年被申候吹拳銭之事、末代為扶持宛行所也、仍可存此旨之状如件、

天正八年

十二月七日

一 嶋 御判  
古川和泉守殿

(D)源安之印所持候之条、同名宗清と隔年に可有所務、吹拳銭之儀、是又遣候、申次之事者、駿河入道被讓置候之間、以立石源六可有披露候、此旨可有存知之状如件、

天正十一

八月廿一日

一 嶋 (花押)  
古川狩野介殿

(E)去年筑前江渡海之剋、為入用、源法銅印沓ケ、父民部丞へ遣之候、不相易致所持、所務可申候、次貢物書手申次之事、赦免候、但吹拳披露之時者、以立石主馬助可申候、仍状如件、

天正十六年

十二月五日

一 嶋 御判  
阿比留彦四郎殿

(A)(B)については吹拳銭が賦課されているが、(C)(D)(E)はこれが免除され、それが扶持として宛行われている。しかし、いずれもが申付人が居って披露されているのである。今(C)(D)の源安図書を採り上げて見ると、肥前上松浦波多島源納の継嗣改給である此の図書名儀の使送船は『朝鮮送使国次之書契覚』によれば、天正二年三月にはじめて古川狩野介が所務して居り、爾来同一人と一族古川和泉守<sup>宗晴</sup>とが隔年交互

に所務し、同八年には吹挙銭が扶持されたが、申次は毎年立石大炊助<sup>○後河</sup>が行ない、同十一年閏二月五日の文引発給の時から申次を大炊助の子源六が代って行なっている。同書に申次人の記載がない渡航貿易船は、申次が免除されたことを意味するが、申次という行為を毎年同一人が行なったり、それが子孫に譲られて世襲されたということは、矢張りこれが得分を伴うがためであると考えられる。(d)文書に「貢物書手申次」という表現があり、吹挙披露と区別されているが、これについては後述する。

## (c) 国次

「国並」とも書かれ、「くになみ」と読んでいる。国次船とは、国主<sup>○この場合馬主</sup>の年次<sup>○歳条と云う</sup>船という意味で、対馬島主歳遣船の謂である。<sup>(一三)</sup>

韓文教育部国史編纂委員会保管の『宗左衛門大夫覚書』永正十・十一年の条に、筆者大浦左衛門大夫某が豊崎郡大浦に於ける見聞を中心に三浦の変後の和平交渉の経過を克明に記しているが、その一節に、朝鮮側の意向として、

高麗はわゆつ<sup>(和号)</sup>かまつり候へ共、そさは廿五そうより外はいやと申候、又六地の書卅九そういやと申候、たゝ国次廿五そうはかり御渡候へと申候、縦高麗仰候分は、唯国次廿五そう渡候へと申候、又弓箭のとき、つれ被渡候唐人、こなたへ御渡候へ、其後申承へく候と申候、いまは、そさのそさうも副不申候、

と述べている。島主歳遣船を「国次」と書き、「そさ」即ち一般の使

送船と明瞭に区別していることが理解されよう。

島主歳遣船は、その隻数に、また船の大小、船夫の定額に変動があったが、一口に云って、嘉吉壬申約条による五〇船が天文丁未約条で二五船に削減され、内大船九、中・小船各八であった。それが弘治丁巳約条で五隻を加定され、うち大・中各二、小船一で、都合三〇船の内訳は、大船一一(一番から十一番まで)中船一〇(十二番から二十一番まで)小船九(二十二番から三十番まで)である。即ち船に順番を附け、若い番号ほど船隻は大きいというわけであった。この島主歳遣船は、明貿易に於ける日本国王進貢船の構成と同様に、名儀は島主宗氏の歳条渡航貿易船ではあるが、実際にはその大部分の所務を知行として家臣に扶持し、その用益権を保証したのである。

毎年国次之書老通、為給分宛行候、如何様色々にあいの可有合力候、仍此旨可存知之状如件、

応仁元年

十月廿六日

貞国(花押)<sup>(一三)</sup>

略兼又国次の書の事うけ給候、はすあひ候へ共、一つう子細あるましく候、よろづ目出重々、恐々謹言、

九月廿三日

貞国(花押)<sup>(一四)</sup>  
宗和守殿

毎年国次書老通進之候上へ、難決之儀あるましく候、為以後一筆進之候よし、貞国書状之旨にまかせて不可有相違之状如件、

大永六



二月十一日

盛長 御判  
宗右馬助殿

来年之国次之疏一通、任愁訴之旨、可遣之状如件、

永禄十三

四月三日

貞信 (花押)  
田口治部大輔殿

島主歳遣船の所務は年条毎に家臣の所望によつて恩給されたことがわかるが、このうちには知行として長期に亘つて毎年所務を認められたものと隔年にこれを許されたものがあつた。また次の判物のように、戦功の恩賞として、或は知行地の打替として所務を与えられたもの、さらに木綿・銀子を使物に提供して、その所務獲得を図るものもあつた。

今度当国錯乱之儀につゐて、大山城におゐて老若堪忍を被届候、誠神妙之至候、しかればあき所可致扶持之由雖申候、依頼知子細、別人に申付候、何様高麗国、如前々相調候へ、必々国次書一通可遣之者也、不可有相違之状如件、

永正十八年

九月廿七日

盛長 (花押)  
大山老若中

為黒嶋之打替、ひのへのいぬとしより、くになみの書、毎年一通可遣之也、未代不可有相違候、仍可存知此旨之状如件、

大永六年

二月六日

盛長 御判  
古川藤兵衛尉殿

木綿四束・銀子四百五十匁、国次老艘之儀、平山左馬允雖懸申候、被相澄平山神四郎へ遣之候実正也、仍状如件、

天正十九年

九月九日

義智 御判  
平山神四郎殿

また次の書状によると、国次の書獲得のために毎年貢物を収め、しかもこれを他人に譲渡することさえあつた。

永正三年ひのへ卯月八日いこのために一つうしたゝめ候て、つかわし候也、一、まいねん御くもつおさめ候て、くたし給候御くになみ御書の事、わたしつかはし候也、御上意をうけ候て、給はられへく候、かいふんほうこうをいたし、いこは御ふちをうけ申されへく候、  
一、○中よて状如件

永正三年寅卯月八日

職永 御判  
宗弥次郎殿

いま『朝鮮送使国次之書契覧』によつて、天正八年(一五八〇)から同十四年(一五八六)まで七年間の島主歳遣船所務者を表示すると、別表の通りである。この表によつて、島主歳遣船の所務が(a)長期に亘つて継続され、さらに親子兄弟に継承されて居り、(b)毎年所務するものが島主たる宗義智を含め、重臣が多く一一名、これに対して隔年所務が三〇名であつた。しかも、(c)船隻の大小が関連する船の番号は必ずしも一定せず、同一船を所務するとは限っていないことがわかる。知行と

歳遣船所務一覽表（天正八〜十四年次）

（数字は船番号、同一枠内は族親継嗣關係を示す）

所務者	年次	宗義智	宗義調	宗義純	宗調國	國分寺	佐須彦四郎 兵部少輔	久和浦上總守 越中守	柳川左馬助 右馬助	立石善左衛門 長門守	中原外記助 式部少輔
天正8	18 1 19 4 29 5	2 3	7		6		8	9	10	11	12
天正9	19 5 1 7 3 18 4	2			6		8	9		20	
天正10	5 1 7 3 29 4	2			6		8	9	10	11	12
天正11	5 1 19 3 4	2		7	6		8	9		20	
天正12	5 1 29 3 4	2		7	6		8	9	10	11	12
天正13	29 1 30 27 28	22		23	6		24	25		26	
天正14	28 1 29 2 30 21	22		23	6		12	13	10	14	11

所務者	年次	佐奈豐安房守 左馬助	中原 織部丞	白祇伊勢守 玄蕃允	清水 左京亮	唐坊民部丞 四郎兵衛尉	古川土佐守	長田治部少輔 修理亮	古川和泉守 （宗晴） 右衛門尉	峯修理亮	立石紹隣軒	吉副勘解由允 三河守	柳野源左衛門尉 將監助
天正8	13		14	15	16	17	20	21	22	23	24	25	26
天正9	14		26						21				
天正10	13		14	15	16	17	20	21	22	23	24	25	26
天正11	14		26						21			18	
天正12	13		14	15	16	17	20	21	22	23	24	25	26
天正13	14		20	4					21			18	
天正14	25	26			3		8	9	27	15	16	24	17

所務者	年次	天正8	天正9	天正10	天正11	天正12	天正13	天正14
峯 帶 刀 丞	27			27		27		27
" 兵 庫 助				30		30		20
吉 副 佐 渡 介	30							
立石四郎左衛門尉		10					10	
森戸左馬助	28			28				19
一宮美濃介		11						
吉川狩野介		12					2	
吉田監物助		13					3	
大浦中務丞		15					4	
平田玄松軒	16						5	
" 宮内少輔								
津江右馬大夫	17						7	
" 次郎兵衛尉								
佐護中務少輔	22						8	
吉賀伊豆守	24						12	
島本紀伊守	23						9	
黒木彦太郎	25							
" 大炊助							13	

所務者	年次	天正8	天正9	天正10	天正11	天正12	天正13	天正14
村山周防守	27				27		15	
梅野大藏丞	28				28		16	
内山宗玄軒	29				30		19	
内山筑前守	30				29		17	
柳川権之助	18				18			5
俵式部少輔	19							
" 因幡介							7	

としての権利関係でも、権利行使者が独自に船隻や貨物を調弁する送使とは可成りの径庭がある。表中、宗義純は天正八年に死んで居り、その後二年間は義智が所務権を収めたが、同十一年から義純の弟で義智の兄に当る伊奈郡代家の調国がこれを与えられ、しかも同十三年からは大船から小船に格下げされている。また吉副勘解由允は隔年所務であったが、天正十一年から毎年所務することを許されている。同書の「天正十一年国次之跡付」に

十八番 当年始而毎年扶助ニ被相定 吉副勘解由允  
 と註記されていることで明瞭である。

## (二) 送使・印官

送使は「そさ」と読み、「国次」即ち対馬島主歳遣船及び「三つ印」

即ち島主特送船以外の一般使送船を指称し、転じてその所務権をも意味する。

(吹 舉)  
大内そさのすいきよの事、いつかたより申候共、そのはうかそさまへに  
は、つかはすましく候、はや／＼と人をあいかたらひ候て、てうせんこく  
(肝 要)  
へわたり候する事、かんようたるへく候、恐々謹言、

七月廿三日

盛 長 御判  
嶋居藤左衛門殿

この文書は『対馬古文書集』に収められ、内野運<sup>○号</sup>は註して、

対琴曰ク、朝鮮貿易ノ盛ナリシコト、他方ヨリ行クモノハ、対州ノ文引  
ノ入ルニ至リシ事、大内氏ノ差者船ヲ斥シテ文引ヲ遣ハサザリシ事、及ビ  
当事ハ志多賀村ガ寄泊ノ多カリシ事、以テ見ルベシ、

とある。内野運が「そさ」を差者、竹内理三博士が使者の字を当てて  
いるのは誤りである。

使送船の所務権というのは、朝鮮政府の貿易規制強化に伴って、歳  
遣船定約者と受図書人の縫合が行なわれた結果、毎年一回本人親ら朝  
鮮に渡航して国都に出仕することができた受職人とともに、受図書人  
が毎歳朝鮮に使船を遣わして、その賜与された図書を捺押した書契を  
携持して土物を献じ、兼ねて貿易を行ない、これによって利益を取得  
する権利即ち貿易に対する用益権を指すのである。受職人はまた親朝  
を重ねると昇階し、副護軍に陞進すると、受図書人と同様に使船を遣わ  
す資格が与えられた。<sup>(三三)</sup>「送使」はまた「印官」とも慣称されたが、印  
は即ち図書、官は官職即ち受職人が任官叙品の際に賜った告身を指し

たもの、これが権利発生の原体であることから、転じてその権利自体  
をも意味する。官に冠の字を当てた場合があるが、これは授職のとき  
告身と共に、その品階に相当する出仕に必要な冠服を賜ったところか  
ら、同じく受職人が享受する権利の意である。図書・告身ともいずれ  
も朝鮮王室から個人に頒給されたものであるが、文引発給権を独占す  
る対馬の宗氏は、朝鮮政府の貿易規制による使送船の削減策に対応し  
て、漸次既得の図書・告身を自己乃至は家中に集約し、その行使し得る  
貿易権をこれまた家臣に給分として宛行ない、あるいはこれを安堵し  
たのである。銅印知行・送使知行などと呼ばれたものがこれである。  
九州大学附属図書館所蔵『文化十二年巡検上使御尋御返答諸事覚書』  
によれば、「送使之事」と題して、次のように記している。

忽て朝鮮国々私方へ銅印を差渡置候、銅印を何の使船差渡候時も其書翰に  
押之遣申候、飛船差渡候時は、吹嘘と申候て私方々之船に紛無之段被書  
載、銅印を押遣候、是を吹嘘と申候、銅印無之船は彼国に請不申、通用不  
仕事に候、自然銅印無之船参り候時は致吟味、無別条候得は漂流船と申候  
て私草梁か屋舗え早速送届申候、若疑敷船候得は打焼申候

この銅印は対馬島主宗氏に頒給された図書を指して居り、文意は文  
引発給の効果述べたものに過ぎない。草梁屋舗とは釜山浦草梁項に  
設けられた和館を指していること勿論である。前掲『藤氏問答覚書』  
に「銅印知行事」として、銅印について説明しているが、

銅印と申は、高麗恭愍王之末比より、日本之親応年比、御家を初、九州中  
国之大名・小名各歳遣船之約条始り候時、朝鮮王より被授候図書之儀に  
て、唐金を以て鑄候印判、何も其人の実名を刻みたる物、今に家々に依相伝

候、

とあつて、歳遣船定約と図書の関係について若干誤解があるが、一応要領を得ている。

要するに送使即ち印官両書は、国次の書と異り、図書・告身そのものが権利発生の源体であるから、所務が知行として宛行われたとしても、図書・告身の所有が不可欠要件であつて、個人に頒給された図書・告身の持つ貿易権は一代限り有効であつた。従つてその所有者が死亡すれば、相続者或はこれを称する者が図書ならば継嗣による改給、告身ならば新授を受けない限りは権利が消滅する。しかも現実には、所有者の死亡や家の没落或は図書・告身の亡逸などによつて相続者がその権利を喪失する場合が多く、対馬宗氏は既得權益の確保による朝鮮貿易の維持強化をはかるため、積極的にこれら図書・告身の対馬集中を行ない、ひたすら権利喪失の事実を秘匿したのである。送使は本人の親朝を必要としないから、縁もゆかりもない他人が権利を行使しても、朝鮮側ではこれを看破する術を持たない。畢竟、年久受図書・受職人を整理淘汰することが焦点となつて来るわけである。知行としては極めて不安定な給分であつた所以もここにあつた。

ところで送使即ち印官両書が国次の書と同様に家臣に恩給されたことは、前項に掲げた数々の判物でも知られるが、国次一艘の競望が木綿四束・銀子四五〇匁の使物を要したように、前掲(A)文書では「源光」○肥前州下松浦三栗野(御野) 図書に白銀四貫文、(B)文書では「源繁」○肥前州五島鳴余(島主) 図書に白銀二貫文・木綿五束が提供されている。この場合、国次より送使に

多額の使物を要したのは、権利の象徴としての図書そのものが給与され、且つその所務が毎年認可されたからに外ならない。

就新印愁訴、為使物、其方与庄司又八郎申合、白銀四貫目馳走候、就夫、今度相叶候源三郎銅印之事、兩人間に遣候、併彼印之儀者、其方致所持、又八郎渡海之時者、印を押而、堅固可渡遣候、吹幸錢之事ハ無懈怠、可有奔走者也、仍如件、

永禄十一年

二月廿六日

義調 御判  
小島宇渡助殿

この判物によると、使物を兩名が折半し、永禄十一年に継嗣改給によつて朝鮮から造賜された「源三郎」○肥前州松浦佐志 図書を小島宇渡助・庄司又八郎兩人に与え、小島が図書を所持して、庄司が渡航する——本人が渡航するのでなく、使送船の渡航を所務することを意味する——時に、使人が携行する書契に踏印して派遣することを命じたもので、これは隔年所務と図書所持者の関係を明かにしている。また

彼送使之儀、就相論、今度相澄候、数年隔事候条、一筆所望申之間、如此候、

一 丙子年	一艘
一 丁丑年	一艘
一 庚辰年	一艘
一 癸未年	一艘
一 丙戌年	一艘
一 己丑年	一艘

辻と半分つゝ、

右此分申定候、次其方別而不断堪忍者候間、貢錢之儀、所有扶持、不可有相違之状如件、

永禄九年 寅 丙  
九月廿日

義調 (花押)  
神宮隼人佐殿

によると、この送使は関西路赤間関居住司猛平康吉子司猛康清名儀の告身による受職人の所謂官書で、もともと佐々木与四郎が所持していたが、その所務権について神宮隼人佐と相論があり、永禄九年に神宮にも定年所務が認められた。丙子年は天正四年に当り、丁丑は同五年、庚辰は同八年、癸未は同十一年、丙戌は同十四年、己丑は同十七年になるので、一応毎三年の隔年所務というわけである。ところが『朝鮮送使国次之書契覚』によると、現実には天正八年と同十四年には明かに隼人佐の子と覚しい神宮主水助が所務しているが、その他の年次は佐々木左近助が所務したようである。『書契覚』の誤記とは考えられないから、何か理由があったものと思われる。天正四・五年は記録を欠いているので全くわからない。とも角、未然の契約である定年所務は知行の性格から云っても実現に全く疑念がないわけではない。しかも興味深いことには、天正十七年次は一艘を辻と半分宛とあって所務の折半が行なわれていることである。その相手は小鹿の辻与八郎かと思われるがわからない。

忠重銅印之事、各並雖可為隔年候、別而大望之条、多年之勲功故、毎年可有務候、殊貢物之儀、是又無別儀候、於吹挙申統儀者、以駿河守可有披露候、永代不可有相違之状如件、

永禄十一年 辰 戊

六月一日

義調 御判  
康 忠 軒  
まいる

これは多年の勲功によつて、隔年所務を毎年所務としたもの、「忠重」図書は、『海東諸国紀』に見える安芸州海賊大将藤原朝臣村上備中守国重の継嗣改給図書である。『書契覚』によれば、元龜三年から天正二年に至る間は大浦康忠軒が所務して居り、記録が中断して、天正八年からは大浦中務丞と同名木工助が隔年に交互所務している。受職人の例では、

依為今度忠節、自分之官書公物之事、末代可扶持也、就其、奉公之立柄、面々可為準拠之状如件

享禄五年

四月十二日

盛 賢 御判  
塚本源太郎殿

塚本氏は彦岐の出身、宗貞盛以来、対馬宗氏に服属して朝鮮貿易にも参稼した家柄であり、対馬における諸公事を免する旨の判物を頂戴しているが、自分の官書とは自己が所持する受職人の貿易権の謂で、その告身の名義は上松浦呼子居住司猛而羅仇羅<sup>〇四郎</sup>である。「公物」とは「貢物」「貢銭」とも書き、「くもつ」「くせん」と読み、この場合は船公事を称したもの、即ちその渡航船の所務並びに船公事を扶持されたのであって、公事の扶持は公事免であること勿論である。規伯玄方の『対馬送使私記』によれば、この官書は「塚本治郎、今有故不朝」とあって、天文の頃すでに所務が行なわれていないが、これまた

その理由は明かでない。

対馬佐護郡之内、伊豆守給分配分之儘、任貞国判形之旨候、又毎年国並書一通、同肥前千葉殿書一通并貢錢自分之書一通、為扶持遣之処、不可有相違之状如件、

永正十年

十二月廿三日

義盛 御判  
宗大膳亮殿

於朝鮮国漂流人連渡候、依其忠、印官両書相叶候条、官之事者、又左衛門ニ被下候、印之事へ義調様より此方へ給候間、為其祝儀、くわの木畠三分二致扶持候、殊売口かい口、木手・山手諸公事、是又致扶持候、為後鏡一筆如件、

永禄拾卯

七月廿日

調昌 (花押)  
武田又左衛門殿

「肥前千葉殿書」並びに「貢錢自分の書」とは、『海東諸国紀』に見える肥前州小城の千葉介元胤若しくはその継嗣改給図書による送使の所務並びにこれが船公事の公事免の謂であって、竹内理三博士が肥前千葉殿書は陸地との貿易、自分の書とあるのは島内交易に関するものと解釈されたのは誤謬である。<sup>(三三)</sup> また永禄十年に漂民刷還の功勞によって朝鮮政府から造賜された図書は、西海道阿久禰島主平久成名儀、受職人の官教は阿久禰居住司猛平鬼徳名儀のものとと思われるが、告身は武田又左衛門が賜わり、図書は宗義調より伊奈郡代宗調昌に与えられ、それぞれ所務を宛行われた。久成と鬼徳の関係から斯様な措置が

とられたのであろうが、このために調昌から桑木畠が船公事と一緒に扶持された。貿易所務権が土地の知行と代替されていることは、さきに黒島の例を掲げたが、まさに対馬ならではである。前掲『書契覚』によれば、元龜三年から天正二年にかけて、『久成』図書による送使は久和浦進士允、平鬼徳は武田又左衛門が所務しているが、天正八年から同十四年までは、前者が宗義調の所務になって居り、後者の所務は停止されている。告身の紛失によるものか明かにできない。

また送使の所務権が国次同様に他人に譲渡され、しかも領主がこれを公認したことは、その知行の性格が土地宛行と異り、飽くまで商業行為を伴う特権であったが故であり、この点については別に論ずる機会があろう。

以上で受職・受図書人の名儀を以てする送使の所務宛行について概説したが、云うまでもなく短期間の部分的資料であるにせよ、『朝鮮送使国次之書契覚』によって、国次即ち島主歳遣船を含めて、これら送使の所務者と吹拳銭申次者との関係が明かにされるのであって、ひろく中世に於ける朝鮮貿易の本質を究明するためには、この『書契覚』そのものの本格的な解明が当然なされなくてはならない。これについて稿を改めて論究したいと思う。

註 (一) 『対馬送使私記』韓国文教部国史編纂委員会保管に

吹拳草案、毎歳不易式、此送使船、納賄路於島主、送遣時、島主以吹嘘之書為証焉、

とあるが、賄路とは手数料を指称したものである。

(二) 『春官志』年例送使に「所持為驗者、有書契及路引」とあって、その註記に

路引、或謂之標文、倭語謂之吹嘘、或謂之水書、

(三) 『宗家判物写』貞享再訂書上三根郷佐賀村塩津留津右衛門所持文明六年八月九日付塩津留主殿助宛宗貞国書下

(四) 同書貞享書上馬廻古川治右衛門所持

(五) 同書貞享再訂書上馬廻内野権兵衛所持

(六) 同書貞享再訂書上馬廻大浦治右衛門所持

(七) 同書貞享再訂書上大小姓小田与右衛門所持

(八) 同書貞享再訂書上馬廻仁位孫右衛門所持

(九) 同書馬廻古川判之允所持

(一〇) 『古文書写』長崎県下県郡厳原町賀島由己氏所藏

(一一) 『宗家判物写』貞享再訂書上大小姓鈴木權平所持

(一二) 竹内理三博士「対馬の古文書」(前掲) 一一六頁に、国並の書とは朝鮮との貿易に関する書状と説明し、これを承けて田中健夫氏『中世海外交渉史の研究』一八九頁では、国次の書は貿易権の所在を意味する印冠を含めての書類の総称であると解説したのは、いずれも本質的な誤解が前提となっている解釈である。

(一三) 『宗家判物写』貞享書上馬廻梅野久右衛門所持

(一四) 『比田勝家文書』長崎県上県郡上対馬町比田勝比田勝雋氏所藏。

『宗家判物写』享保書上豊崎郷比田勝村比田勝金右衛門所持

(一五) 『宗家判物写』貞享書上歩行木寺源右衛門所持

(一六) 同書享保書上三根郷三根村給人田口善右衛門所持。東京大学史料

編纂所影写本『田口宗喜氏所藏文書』

(一七) 『大山小田家文書』(前掲)。『宗家判物写』享保書上与良郷大山

村大山喜左衛門所持

(一八) 『宗家判物写』貞享書上馬廻古川判之允所持。丙戌年は大永六年である。

(一九) 同書貞享書上三根郷青見村平山三郎左衛門庶子同名判左衛門所持

(二〇) 同書貞享書上馬廻幾度六右衛門妻所持

(二一) 同書享保書上三根郷志多賀村百姓藤兵衛後家所持

(二二) 竹内理三博士「対馬の古文書」(前掲) 一一二頁

(二三) 『朝鮮中宗実録』卷八中宗四年三月辛亥

(二四) 『宗家判物写』貞享書上集小島宇渡助所持

(二五) 同書享保書上与良郷尾崎村神宮半右衛門持来分

(二六) 同書貞享書上伊奈郡小鹿村辻近左衛門所持天正十一年八月廿七日

付辻与八郎宛宗盛勝書下。同書享保書上伊奈郷小鹿村辻七左衛門頂戴分には天文十一年となっている。伊奈郡代宗盛勝の在世年次から考えて、天文が正しい。

(二七) 同書貞享再訂書上馬廻大浦小左衛門所持

(二八) 同書貞享書上歩行高本松左衛門所持

(二九) 同右永享八年十月十四日付墳本宛宗貞盛書下

(三〇) 同書貞享書上馬廻吉賀兵右衛門所持永正十八年八月五日付宗大膳

宛宗盛長書下

(三一) 公物が一般に課税物件を指していることは、『宗家判物写』享保

書上豊崎郷舟志村武本九左衛門所持分に

(唐舟志)

豊崎郡東しゅうしの村くひりのかま所の事、あたらしくとりたて候よ

し依申、公物未代所遣之、於向後不可有相違之状如件、

天文十八年十月十日

讃岐守 晴康(花押)

武末藤右衛門尉殿



とあるので理解されるが、国次の書が毎年貢物を収めることによって与えられる例としては、註(二〇) 同書貞享書上馬廻幾度六右衛門妻所持永正三年卯月八日付宗孫次郎宛宗職永書状がある。

(三二) 『対馬送使私記』に記載された受図書人の所務表の内容は、大間秀吉公日域一統以前とあるだけでいつ頃のものか明らかでないが、中村栄孝教授はこれを永禄十年以前と判断されている。『日鮮関係史の研究』下巻二二五頁。所務者の中、古屋新左衛門は『河内大浦家文書』九月廿五日付宗義調書状にその名が出て居り、松雲は『書契覚』にその名が見える立石松雲軒と推定されること、『宗家判物写』所収の文書によって、永禄十年新受の平久成図書及び平鬼徳告身、同十一年新受の源光図書の所務が記載されていないことから判断されたものと思われる。しかし大永二年に受職人となった薩摩坊津居住司猛左馬助家久が今往来なしと載って居り、「今有故不朝」とある上松浦呼子居住而羅仇羅の告身は享禄五年に塚本源太郎に恩給され、また天文五年に受図書人となった古東島太守大蔵兵庫頭平朝臣親忠の名が見えないので、天文二年から五年の間のものでと考えられる。従って国主は盛賢(将盛) 浜浦は賢尚(のちの晴康) 摂州は佐須盛廉と推定される。

(三三) 『宗家判物写』貞享書上馬廻吉賀兵右衛門所持

(三四) 『武田家文書』長崎県上県郡上県町志多留武田家幸氏所蔵。『宗家判物写』貞享書上伊奈郡志多留村武田与助所持

(三五) 竹内理三博士「対馬の古文書」(前掲) 一一六頁

(補二) 本論文脱稿後、田代和生氏が『日本歴史』二六八号に「近世対馬藩における日鮮貿易の一考察」なる論文を発表し、元禄銀及び宝永特鑄銀の朝鮮への輸出経緯を詳論しているが、江戸時代の貨幣改鑄と朝鮮貿易代銀決済との関係を解明しようとした論考は、田谷博吉博士『近世銀

座の研究』がある。ただ宝暦五年の特鑄銀鑄造停廢が人參輸入決済代銀を膠着させ、これが延いて私貿易の断絶を継起したという田代氏の見解は、卓見として傾聴に値しよう。

(補三) 『通航一覽』巻一三八貿易に近藤某所蔵留書として、安永元年九月に交易事情調査のため来島した普請役佐久間甚八書上を載せているが、これに朝鮮貿易が衰えて、その所務銀一、四八四貫余、四つ物成にして六一、八三七石余が年々損削した事情を説明し、併せて対州、肥前及び送使の所務を分類して詳細に記述している。

また勝安房の『開国起原』には文久二年八月に来島した外国奉行野々山丹後守兼寛らの島内巡視報告書を収めているが、これにも対馬藩の实高について、藩役人の申立に基づいて数字的に分析計算した報告がある。これら幕末の数字と『口上覚書』の数字とを対比して、さらに検討を加えなくてはならない。

(本学教授・文博・国史学)